Tulips University of Tsukuba Repository

筑波山南麓地域の田畑・山林利用と養蚕信仰の展開

著者	中西 僚太郎，原　遼平，豊田 紘子，高橋 淳，伊藤 大王，王 君香
雑誌名	歴史地理学野外研究
巻	19
ページ	31-61
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160480

歴史地理学野外研究　第19号　31～61　2020

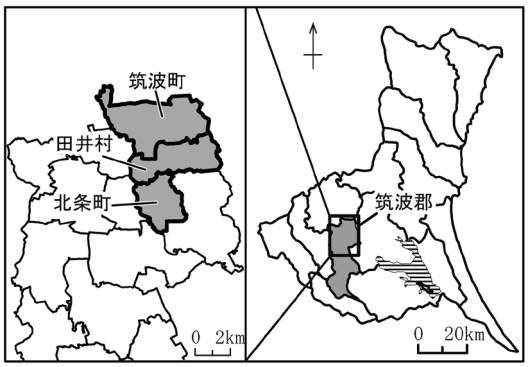
筑波山南麓地域の田畑・山林利用と養蚕信仰の展開

中西僚太郎・原　遼平・豊田　紘子・
髙橋　淳・伊藤　大生・王　君香

Ⅰ　はじめに

本稿は，つくば市旧筑波町の旧田井村地区を中心とした筑波山南麓地域の歴史地理学的諸問題の検討を意図したものである。筑波山南麓地域は，2005（平成17）年のつくばエクスプレス開業後，筑波山登山の観光客で賑わうようになった一方，人口減少により，地域全体としては多くの課題を抱えるようになっている。2011（平成23）年には筑波山麓グリーン・ツーリズム推進協議会が設立され，地域活性化のため，歴史や文化の掘り起こしが進められているが，学術的に深めるべき課題は多く残されている。地域住民の高齢化に伴い，かつての伝統や歴史は忘れられつつあり，その記録をとどめておくことは急務の課題である。

田井村は筑波郡に属し，北は筑波町，南は北条町に接する（第１図）。近世の藩政村は臼井村と神郡村であり，臼井村は17世紀末以降は筑波山神社領，神郡村は17世紀後半以降は旗本領であった[1)]。1889（明治22）年に両村が合併して田井村が成立した。その後，田井村は1955（昭和30）年に筑波町，北条町，小田村，田水山村と合併し，新制の筑波町の一部となった。そして1987（昭和62）年のつくば市誕生に伴って，翌年に筑波町はつくば市に編入合併され，つくば市の一部となった。大字は臼井と神郡の２つであるが，臼井内には，臼井と六所，立野の３つの集落，神郡内には神郡と館の２つの集落がある。1955年の合併前の現住人口は2,895人，現住戸数は507戸であった[2)]。村域は筑波山南麓の斜面と，その南を東西に流れる逆川，男女川周辺の低地とそれを囲む山々（南方は神郡山，東は入山）からなり，三方を山に囲まれ，西側に開いた地形をなしている。田井村周辺は古くから開けた地域で，古墳が点在するほか，神郡西部の低地には条里制の遺構が存在していた。また，臼井には万葉集にも歌われるとされる飯名神社，神郡の館には，成務天皇の時代（４世紀中頃）の創建と伝えられ，養蚕の神様として全国的に知られる蚕影神社があり，臼井の六所には筑波山信仰の里宮であった六所神社がかつて存在した。



第１図　研究対象地域

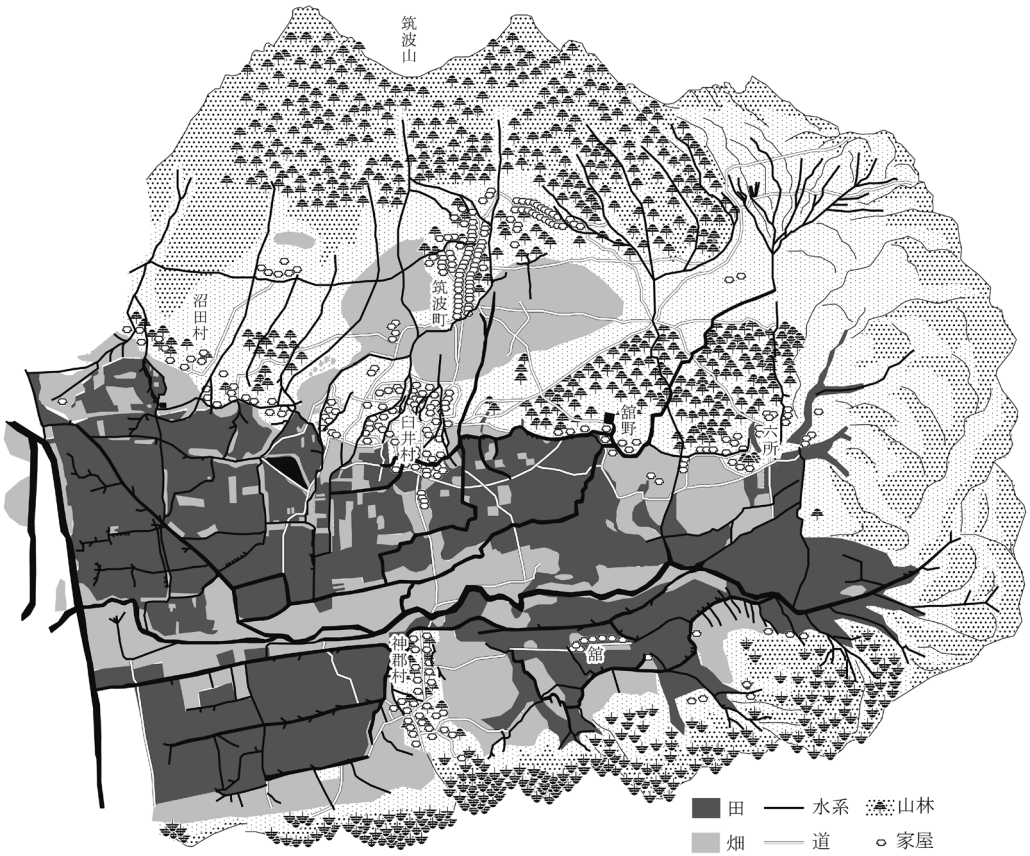
このような田井村について，本稿では近世以降の土地利用と農業を中心とする生業の変遷，ならびに蚕影神社とそれに関わる養蚕信仰，信仰圏に着目し検討を進める。田井村に関しては，臼井村，神郡村の山林利用，用水と関係する近世の絵図が比較的豊富に残されている。第Ⅱ章では，その絵図を出発点として，明治以降の地形図の記載内容の変遷を追うことにより田井村を中心とする筑波山南麓地域の土地利用の変遷を検討する。第Ⅲ章では，近世の絵図と近代の地籍図から見た耕地の形状と土地生産力の特色，昭和期の戦前戦後における主要農産物ならびに柑橘の栽培，田井村の共有林の所有形態とその利用について検討する。第

Ⅳ章では，蚕影神社の境内地の現状を記録するとともに，残される石碑を元にかつての信仰圏の広がりについて検討する。

Ⅱ　近世・近代の土地利用

（1）絵図にみる近世の土地利用

臼井村，神郡村に関する近世の絵図のなかで，筑波町も含めた周辺地域を広く描いてあるのがトレース図を示した第２図である。これは1694（元禄７）年に，近隣の筑波町，沼田村と臼井村，神郡村との間の用水争論の際に作成された図である[3)]。用水争論の図ではあるが，当時の土地利用がよく描かれている。田畑に関して，田地は沼田，臼井，神郡の村ごとに色分けして描かれており，畑地に関しては判然とし難いが，村ごとに異なる色で記されているようである。第２図では村ごとの田畑の色分けは考慮せず，田畑の違いのみを表現した。低地は田畑が広がっているが，逆川の周辺には畑地が東西に細長く分布している。注目されるのは後述の掘下田と島畑を反映したと思われる表現が低地の所々に見られることである。用水争論の絵図であるため，田地の形状にも注意が払われていたことの表れであろう。これは当時すでに掘下田と島畑が形成されていたことを示すものといえる。低地の周辺は畑であるが，筑波山南麓は筑波山神社（当時は中禅寺）の門前集落の周辺まで畑地が広がっていたことが注目される。そのなかで，舘野（立野）と六所の集落背後の斜面は林地として描かれ畑地となっていないが，そこは



第２図　絵図にみる筑波山南麓地域の土地利用
注）原図に凡例はないが，筆者が付け加えた。
（1694（元禄７）年「筑波町沼田村と臼井村神郡村水論裁許絵図」により作成）

沢になっており（東方の上流部は白滝），急斜面であったため，畑地としては開発されなかったと考えられる。

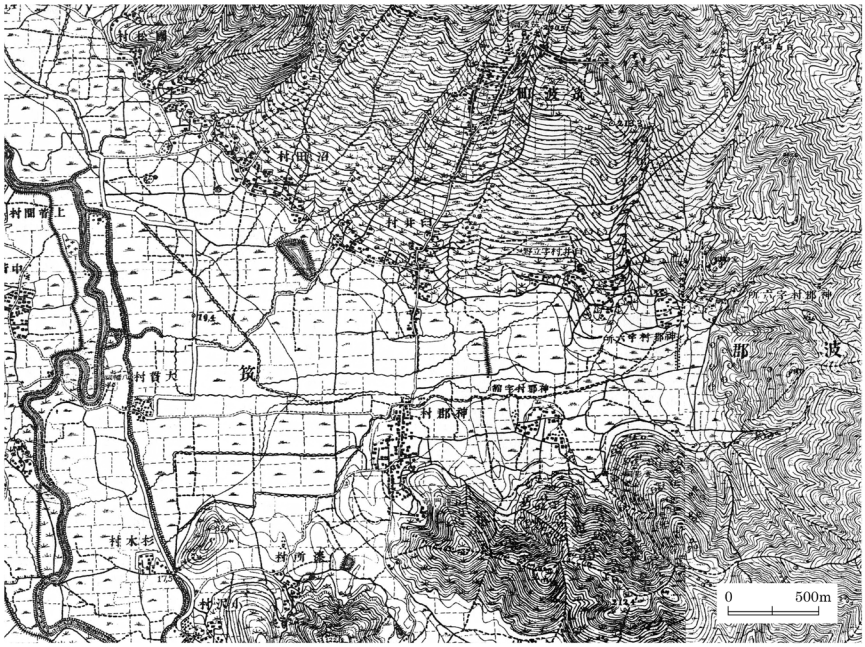
（2）地形図にみる近代の土地利用

明治前期の田井村周辺の土地利用を1884（明治17）年の迅速測図によって示したのが第3図である。低地の土地利用は田地（地図記号では水田）が多いが，逆川の周辺部は河道に沿って東西に細長く畑地（当時の地図記号上，普通畑は無印）が認められる。これは後述の空中写真にみるように掘下田と島畑が分布する地域であるが，掘下田や島畑は地形図には表現されず，単に畑として記されたためと考えられる。畑地は田地の周囲に分布するが，筑波山南麓斜面では筑波山神社付近まで畑地が分布している。その様子は，第3図に示した迅速測図では判別し難いが，迅速測図原図[4]をみると畑地は色分けされており，筑波山南麓斜面では畑地が林地（主に松林）のなかに小規模な塊として点在している状況がよくわかる。また，同斜面には畑地と同じ色彩ではあるが荒地として記される場所もあり，それらは第3図の迅速測図でも読み取れる。

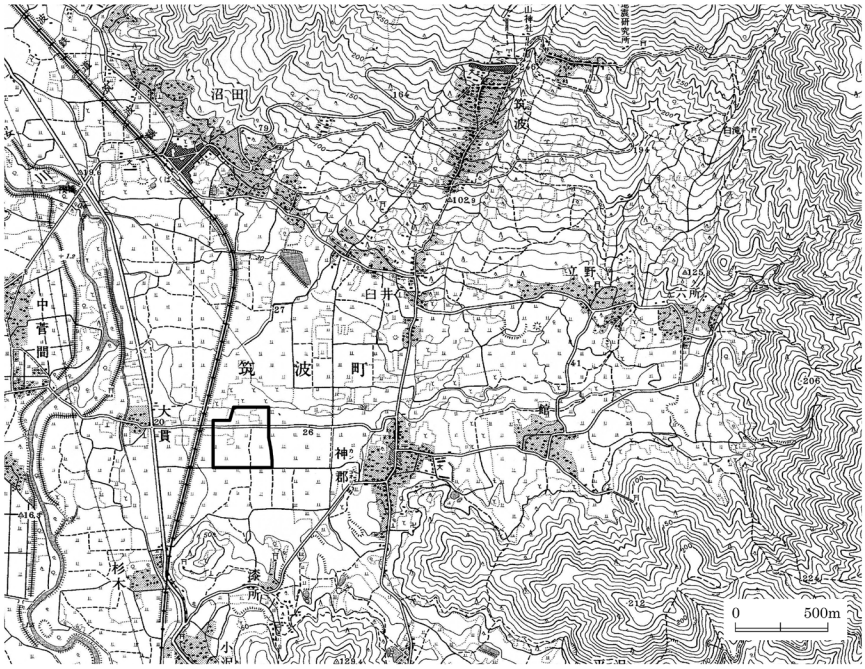
第4図は1961（昭和36）年の2.5万分の1地形図を示したものであり，この図は当該地域に関して最初に作成された2.5万分の1地形図である。基本的な土地利用は，明治期と変わりないが，逆川周辺部の畑地には桑畑が多く認められ，養蚕の発展とともに畑地の桑園化が進んだことが読み取れる。筑波山南麓斜面には耕地が広がっていたが，当時の地形図では迅速測図と同様に，普通畑は無印であったため（空地と同じ扱い）その広がりは図からはわかりにくい。第5図には同時期（1960年）の空中写真を示したが，畑地の広がりがよくわかる。筑波山神社の門前町の東部斜面には広域に渡って耕地が広がり，門前町の南部と西部にも耕地が広がっている。また，立野と六所の北部の斜面にも耕地が南北に広がるが，そこには地形図にみるように果樹園が比較的多く存在していた。これらの耕地の分布を明治前期と比べると，全体的に量的に拡大し，面的な広がりを持つようになっているといえる。明治中期以降，山麓斜面の耕地開発が進んだことがわかるが，聞き取りによると，戦後の昭和22，23年頃には食糧増産のため開墾が奨励され，地主の承諾がなくても開墾をしてよい状況であったという。第5図にみる山麓斜面の耕地の広がりは，従来からあった耕地に加えて，戦後の開拓によって形成されたと考えられる。

第5図の空中写真からは地形図では判明しない耕地の形態を知ることができる。館の南部や東部の小さな谷筋に入り込んでいる田地は，小規模ながらも見事な棚田を形成していたこと，逆川下流部の川沿いには，不鮮明な画像ではあるが，掘下田と島畑が形成されていたことが読み取れる。この地域における掘下田と島畑は，逆川の氾濫によって生じた自然堤防状の微高地を，少しでも開田しようとした結果として形成されたものと考えられる[5]。逆川は小規模な川であるが，増水時の氾濫はすさまじく，1919（大正8）年の『筑波郡案内記』には「一旦急雨あれば忽ち漲溢，或は沿岸家屋に浸水し，歇めば忽ち減ず，其の水脚増減の急なること，宛然漏斗に水を注ぐが如く往来甚だ危険なることありといふ」[6]，と記されている。このような氾濫により，河川沿いの微高地の形成が進んだと考えられるが，逆川は桜川に注いでいるため，桜川の増水により水流が逆流し，河川沿いが浸水することも少なくなかったと思われる。

第6図には1994（平成6）年の2.5万分の1地形図を示したが，1961年と比べるとこの間に様々な地域の変化があったことが読み取れる。農地に関して低地では圃場整備事業が進み，耕地の形状は方格状に整えられた。同時に地域の農業用水は，かつての筑波山麓からの水やため池に依存する形から霞ヶ浦用水に変化した。ちなみに，旧田井村，旧筑波町周辺の水田に給水する霞ヶ浦用水の神郡幹線の水路建設は1985（昭和60）年に着工し，1991（平成3）年に完成している[7]。筑波山南麓斜面の耕地は減少し，耕地（畑地）は点在するものの，かつて耕地であったところの多くは荒

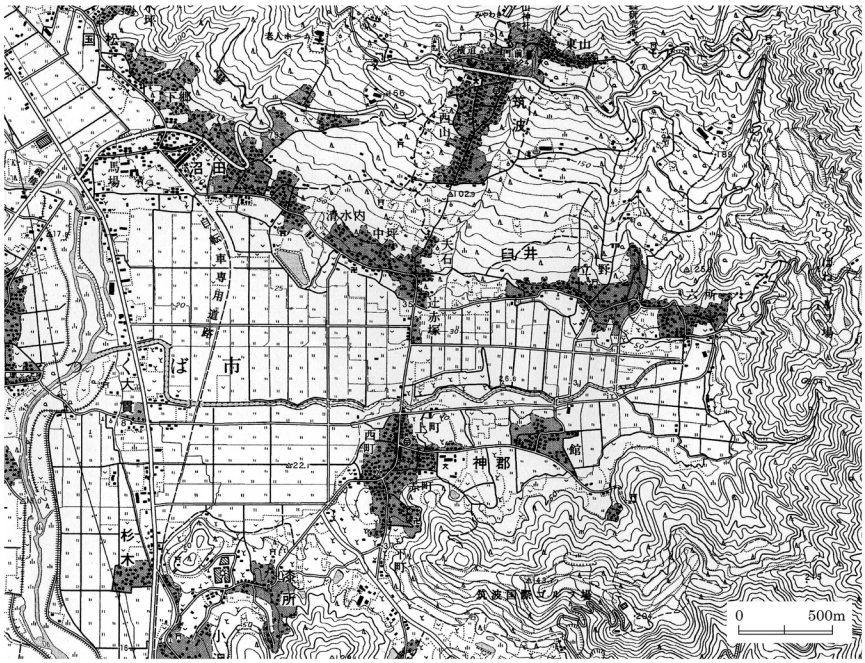


第３図　迅速測図にみる田井村周辺の土地利用（1884年）
（地図資料編纂会編『明治前期関東平野地誌図集成』柏書房，1989，による。
原図は迅速測図「筑波町」「柿岡村」。）

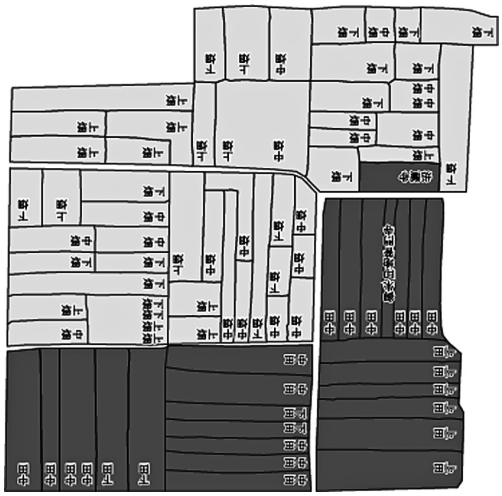


第４図　地形図にみる田井村周辺の土地利用（1961年）
注）図中の四角の太枠は第７図，第８図の範囲。
（2.5万分の１地形図「筑波」1961年測量による）

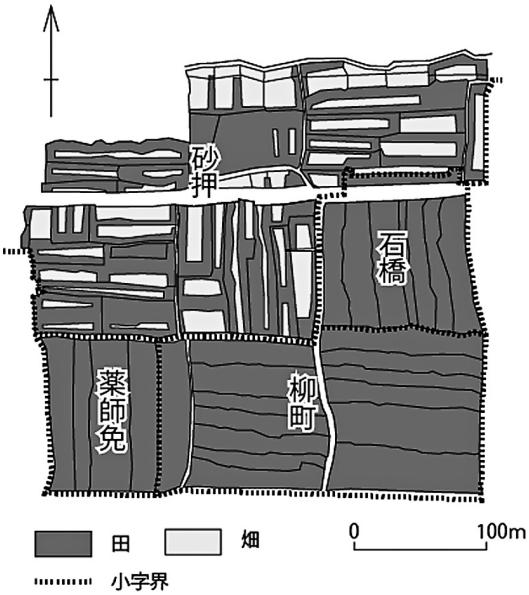
第５図　空中写真にみる田井村周辺の土地利用（1960年）
（国土地理院ウェブサイトの空中写真　KT602YZ-3-6280を使用）



第６図　地形図にみる田井村周辺の土地利用（1994年）
（2.5万分の１地形図「筑波」1994年修正による）



第７図　地押絵図にみる耕地と地目
注）原図では田地は白，畑地は草色であるが，
その表現は第８図に合せた。
（1836（天保７）年「神郡村地押絵図」により作成）



第８図　土地宝典にみる耕地と地目
（『つくば市土地宝典　筑波・北条・田井地区』
により作成）

地に変化している。旧田井村東部と南部の山林に関しては，ゴルフ場が建設され土地利用は大きく変化した。

Ⅲ　近世・近代の田畑と山林利用

（１）田畑の形状と土地生産力

近世の神郡村に関しては，1836（天保７）年の地押絵図が残されている[8)]。その絵図は地籍図に類似した図で，神郡村全体について耕地・屋敷地の一筆毎の形状が示され，その地目と面積，保有者が記されており，畑地は草色に彩色されている。この絵図が作成された経緯は明らかではないが，近世村落の耕地の在り方を知るうえで貴重な史料である。この絵図の一部をトレースして示したのが第７図であり，同範囲の土地宝典[9)]をトレースして示したのが第８図である。図で示したのは神郡村の西南部で，条里遺構がみられる地域の一部であり，字は薬師免，柳町，石橋，砂押である（第４図参照）。図中の薬師免，柳町，石橋で見られる方格状の地割は条里制を反映したものである[10)]。第７図と第８図を比較すると，土地宝典において掘下田と島畑の分布がみられる砂押の部分は，地押絵図ではすべて畑として記されている。1836年頃にこの場所にすでに掘下田と島畑が形成されていたか否かは断言できないが，さきに見た17世紀末の絵図には，砂押の場所ではないが，掘下田の存在を思わせる表現があることから，1836年頃に砂押の辺りでも掘下田と島畑が存在したとみるのが妥当であろう。そのように考えると，近世の地押絵図では，掘下田と島畑の場所はすべて畑として把握されていたといえる。

地押絵図で田畑の等級をみると，田畑ともに上中の等級が多く，下田や下畑はわずかである。条里制施行地域は古くから開発された場所であり，その土地は比較的生産力が高かったことがうかがえる。

（２）主要農産物

田井村の主要農産物について，『筑波郡郷土史』[11)]をもとに1925年頃の生産量を示したのが第１表である。生産額の比較ではないので，厳密には言えないが，生産量からみて米が最も重要な農

第１表　田井村の主要農産物（1925年頃）

品目	単位	数量
米	石	4,663
大麦	石	1,773
裸麦	石	17
小麦	石	804
大豆	石	564
甘藷	貫	25,760
馬鈴薯	貫	12,100
春蚕	石	547
秋蚕	石	263
桑	貫	160,120
卵	個	24,600

（『筑波郡郷土史』により作成）

第２表　田井村の主要農産物（1953年）

品目	単位	数量
水稲	石	5,100
陸稲	石	2
大麦	石	1,502
小麦	石	831
大豆	石	368
小豆	石	24
甘藷	貫	42,150
馬鈴薯	貫	21,065
たばこ	貫	2,000
繭	貫	2,300
桑	貫	2,500

（『茨城県市町村合併史』により作成）

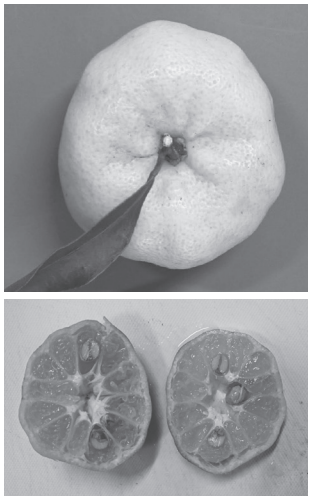
産物であったことは疑いない。それに続くのが大麦・小麦であるが，1928（昭和３）年の統計[12]によると，大麦は生産量の24％，小麦は47％が水田の裏作として作られていたものであった。田井村では1924（大正13）年の二毛作田は水田全体の６割に及んでおり[13]，水田裏作での麦の生産が重要な意味をもっていた。食糧としては米麦以外には，甘藷と馬鈴薯が重要であった。養蚕は春蚕を主としながら秋蚕も行われており，そのための桑の生産も盛んであった。

第２表は1953年の主要農産物の生産量を示したものである[14]。米をはじめとする各農産物の生産量とそれらが全体に占める割合に大きな変化はないが，桑の生産量の減少にみるように，1953年は1925年頃に比べて養蚕は減少していた。代わって顕著に増えているのが甘藷と馬鈴薯の生産量であり，戦中・戦後に食糧増産のためイモ類の作付けが増加していたことがうかがえる。この養蚕の変化を桑園面積の変化でみると，1915（大正４）年の田井村の桑園面積は39町であったが，1935（昭和10）年には66町に増加している[15]。大正から昭和初期にかけて養蚕が盛んになったことがよくうかがえる。その後，終戦直後の統計はないが，農林業センサスによって1970（昭和45）年の工芸農作物の収穫面積をみると旧田井村全体で1,570aとなっている[16]。工芸作物には茶なども含まれるが，旧田井村の場合，大部分は桑と考えてよいので，1935年と比べると５分の１程度に桑園は減少したといえる。そして同資料によるとその面積は，1975年には994a，1980年には172a，1985年には50aにまで減少しており，その減少はこの時期における養蚕の衰退を如実に示している。

なお，聞き取りによると，臼井地区では昭和30年代後半から40年代にかけて，蚕種製造を行っており，繁忙期には福島方面から女性を雇うなどしていた。また，蚕種製造は繭作りに比べて格段に収入が多かったという。戦前に比べて養蚕は全体的には衰えたとはいえ，1970年代頃までは重要な産業であったといえる。

（３）柑橘栽培

筑波山麓にはフクレミカンや温州蜜柑などの柑橘類が集団的に栽培されており，筑波山麓の特産品となっている。北関東に位置しながら柑橘栽培が可能となったのは，筑波山に発生する山腹温暖帯によることが従来指摘されてきた[17]。1950（昭和25）年に筑波山麓の総合開発の一環で温州蜜柑を栽植したことが現在の集団栽培の契機となったが，筑波山麓において温州蜜柑の栽植そのものは明治10年代になされていたことが確認され，またフクレミカンはすくなくとも江戸期には存在したと考えられる[18]。フクレミカンは別名，相模蜜柑や相模橘ともいわれ，関東地方，とくに神奈川県に多く繁殖している柑子の一種である。フクレミカンは有核で，黄色の果皮が浮き皮となり剝皮が



第９図　フクレミカンの外観と断面
（2018年に筆者撮影）

容易である特徴をもち（第９図），その皮の膨らみからフクレと名付けられたといわれている[19]。ここでは温州蜜柑が普及する以前から筑波山麓に存在していたフクレミカンがどの程度生産され，どのように人々に食べられていたのか検討する。

1904（明治37）年に書かれた筑波町の物産を紹介する記事には，蜜柑について記載がある（下線は筆者による。以下同）。

> ○蜜柑　山麓蜜柑樹多し。毎歳各地に売り出すもの夥多，其収入額年千円に上りしも，近時各地より格安のもの多く市場に現わるるを以て，現時は年額六百円内外に減少せり。爾り筑波蜜柑の名は其産出額の些少なるに拘はらず，広く世に知られたり。然れども其品質に於て甚だ佳良なるものに非ず。故に近年大いに顧みる処あり。温州種を栽培して，其成績亦見るべきものあり。殊に（筑）波山の地たる冬季尚温暖にして霜除けの手数を要せず。故に寒を厭ふ此の種の果樹を栽培するに適すべし。若し夫れ冷気天に充ちて満目蕭殺たるの時，其黄熟せる果実の橙々たるを見る。亦頗る趣あり[20]。

この資料で扱われている蜜柑は，その品種が温州種と比較されていることから温州蜜柑以外の品種であり，また黄熟せる果実とあることから，温州蜜柑ではなくフクレミカンであると考えられる。山麓に多くの蜜柑樹があるという記載からフクレミカンが販売用に栽培され各地へ出荷されていたこと，またフクレミカンではなく筑波蜜柑という名称で販売されていたことがわかる。品質が佳良ではないため温州蜜柑を導入すべきとしている点からは，筑波蜜柑は現在の主たる利用法である陳皮でなく，生食用の柑橘類として人々に食されていたことが推定される。資料の終わりの記述からは，山麓に多数の結果したフクレミカン樹が栽植されている様子が美しい景観として認識されていたことが考えられる。

1911（明治44）年以降には，茨城県農事試験場は県内４か所に果樹試験地を設置し，そのうち行方郡麻生町麻生，筑波郡田井村臼井の２か所では梨や葡萄などの果樹に加えて，複数の柑橘類を試験栽培している。臼井の試験場は３反歩あり，柑橘類としては温州100本，夏橙４本，トムソンネーブル５本，ワシントンネーブル10本，早生温州20本，無核紀州16本を栽植した[21]。臼井の試験場に栽植されたこれらの品種は明治中期ごろから全国の柑橘産地で導入が進められていた品種で，夏橙以外は無核である。試験場にはほかに洋梨や葡萄なども試験栽培していたが，栽植本数は５本前後のものが多く，温州蜜柑の樹数が圧倒的に多い。果樹のなかでも温州蜜柑をはじめとする柑橘類は明治初期から海外輸出が開始され，外貨を獲得する農産物として，明治中期以降，府県農会等の農業団体を通して温州蜜柑栽培が各地に推奨されており，茨城県においても温州蜜柑の導入を試みたものと考えられる。

筑波山麓地域に温州蜜柑栽培が開始されるなか，1919年の旅行記にはフクレミカンが旅行者に提供されている場面が見受けられる。

> 旅館は江戸屋が一番好いと聞いていたので，町の一番上の，筑波神社のすぐ前にあるその家へ行って泊った。（中略）私の行ったのは

第10図　筑波山観光における筑波蜜柑（1958年）
（茨城県広報課『茨城県映画　筑波山』より転載）

> 十二月の初旬だったが，山の畑で穫れたという蜜柑が，食後（デザート）の水菓子として出された。種子のある小さな蜜柑だけれど，黄色く熟していて，味も一寸うまいような気がした[22]。

江戸屋は筑波山神社門前の旅館で，江戸屋に宿泊した旅行者が水菓子として蜜柑を食べたことを述懐している。種子のある，小さな黄色い蜜柑という特徴から，温州蜜柑ではなくフクレミカンであると推定される。種子や果皮の色に言及していることから，フクレミカンは無加工の状態で提供され，旅行者は生食していると考えられる。

現在，筑波山麓地域やつくば市の特産品として利用されているフクレミカンは，「福来みかん」という名称で，果実よりも果皮の利用に価値がおかれているが，かつては「筑波蜜柑」という名称で果実の生食がなされており，生食を目的とした果実の販売がなされていた。一方，茨城県が制作した昭和30年代の筑波山麓地域の映像では，筑波山観光のついでに山麓付近の温州蜜柑畑で収穫を楽しむ観光客の姿が映し出されるが（第10図），ここで「筑波蜜柑」として紹介されているのは温州蜜柑であり，フクレミカンは一切登場しない。

（4）山林の所有形態と利用

田井村には約400町歩の山林があったが[23]，そのうち約250町歩は，近世に臼井村と神郡村の入会地であった場所であり，その所有形態は明治期以降やや複雑に変遷した。その変遷は，神郡共有森林会の「入山共有森林沿革誌」[24]によると次のようである。

明治初期には約250町歩の入会地は官有地に編入されたが，神郡村住民の熱心な運動により，1881（明治14）年には神郡村に払い下げられた。その後，1898（明治31）年には，約250町歩のうち86町歩は臼井と神郡の刈会地であることが認められ，1900（明治33）年には，86町歩のうち半分の約43町歩が臼井に譲渡され，約43町歩は神郡住民の分担経営となった。1914（大正３）年には，部落有林統一の政策を受けて，神郡部落有林のうち約81町歩と住民分担経営の約43町歩，合計約125町歩が田井村の村有基本財産に編入された。神郡部落有林の残りの約81町歩は，神郡の区有財産となり，神郡共有森林会が設けられた[25]。

なお，聞き取りによると，旧田井村の共有林は現在でも存続しており，森林保全組合が管理し，約164町歩あるという。また，神郡共有森林会は昭和26，27年頃に地権者に土地を分配したという。

共有林は明治初期にははげ山状態であったが，その後に植林が進み[26]，共有林からは建築用の木材が切り出され，田井村や地区の財政を潤した。そして，田井村の共有林であった場所には，1972（昭和47）年にゴルフ場建設の認可がおり[27]，ゴルフ場が設けられ，今日に至っている。

Ⅳ　蚕影神社と信仰圏

（1）蚕影神社の概要

蚕影神社は境内に設置された案内板によると，創祀は第13代成務天皇の頃であるとされる。忍凝見命孫，阿部閇色命が筑波国造に赴任し，祭政一致の政務に基づき，筑波大神に奉仕し，豊浦に稚産霊神を鎮祭したことが始まりであり，忍凝見命孫及び阿部閇色命は農業と養蚕業の振興に多大なる力を注いだとされる。一方で，この創祀には他

の説も存在し，1919年の『筑波郡案内記』には926（延長４）年に筑波国造権太夫良平の創祀によると記されている[28]。また，近世期に別当寺である桑林寺が記したとされる『蚕影山略縁起』には崇神天皇の頃である[29]と記してあり，詳細な創祀年代は不明である。祭神は稚産霊神，埴山姫命，木花開耶姫命で，祭祀は毎年３月28日に実施される豊蚕祈願祭と10月23日の豊蚕祈願祭であり，正月元日には元旦祭を実施している。なお，関東圏を中心に同名の神社が存在するが，それらは本社の分社である。このため，案内板には神社の御神札に「日本一社」と拝記すると記されている。また，1909（明治42）年には臼井地区の六所神社が廃社となったことで，六所神社の神霊も合祀された。旧社格は村社である。

近世期には別当寺である桑林寺の影響が強かった。桑林寺は同じ神郡地区に存在した真言宗の寺院であり，同地区の普門寺の末寺であった。山号及び院号は蚕影山吉祥院であり，創建は1673（延宝元）年から1747（延享４）年の間であるとされる。桑林寺は1813（文化10）年に江戸の回向院で蚕影山大権現の出開帳を行ったほか，関東圏の各村落にて配札を行っており，蚕影山の信仰の拡大に寄与していた。一方で，1862（文久２）年には普門寺から借金をしたことが確認でき，関東圏各地への分社許可状や配札等の収入があったものの，分社の建立や修復への寄進等により，財政的には苦しかったと考えられる[30]。桑林寺は明治期に廃仏毀釈運動で廃寺となり，現在跡地は竹藪の中に無縫塔を数基残すのみとなっている。

蚕影神社の祭神は上記の通り，稚産霊神，埴山姫命，木花開耶姫命の三柱であるが，本社に深く関係する伝説として金色姫伝説が挙げられる。その概要を示すと，天竺の姫であった金色姫は継母に殺害されることを恐れ逃れるが，逃げきれないことを知った父は姫を桑木の穿船に乗せ，海に流した。金色姫を乗せた船は常陸国筑波郡豊浦湊に流れ着き，村正権太夫がこれを助け介抱したものの，姫は亡くなってしまう。姫の亡骸を納めた棺の中から虫がわき出し，権太夫夫婦が箱の中を確認すると，姫の亡骸は無く，代わりに蚕がいたというものである。この蚕で権太夫夫妻は養蚕を始め，豊浦の船着河岸に新しく御殿を建て，姫の御魂を中心に，左右に富士，筑波の神を祀り，蚕影山大権現と称したのが蚕影神社の始まりであるとする。現在，豊浦は地名としては残っていないが，蚕影神社の麓に位置する館の児童館の敷地内には太夫宮と呼ばれる祠が存在し，船ノ宮も臼井地区に存在している。この船ノ宮は稲荷宮と並んで配置されているが，祠の裏には1960（昭和35）年に土地改良工事に伴い，臼井地区の他の場所から移設されたことが記されている。西海は，御師等による宗教活動により，蚕影山は蚕を，上州榛名山と武蔵御岳山は桑を守る神に位置づけられ，それぞれが養蚕業従事者の信仰の対象となったこと，また金色姫伝説は蚕影神社による宣伝活動のひとつであると指摘している[31]。

本殿及び拝殿には奉額が多く掲げられており，本殿と拝殿を結ぶ通路の壁の修復にも奉額が使用されている。また，現在はほとんど残っていないが，かつては額堂に多くの奉額が掲げられており，近江は2011年の時点で1907（明治40）年から1989（平成元）年にかけて奉納された額は36枚あり，奉納は茨城県21枚，栃木県７枚，長野県３枚，埼玉県２枚，群馬県２枚，千葉県１枚であったとしている。また，奉納者は全体的に養蚕実行組合や蚕種共同組合が多かったとしている[32]。また，上記の金色姫伝説に関係する奉額（第11図）も存在し，伝説が広く受け入れられていたことがうかがえる。

（２）蚕影神社の登拝道と境内

a．蚕影神社の登拝道

西海は筑波山への登拝道は土浦－藤沢－高岡－小田－平沢－神郡－臼井－筑波山であり，蚕影神社の登拝道と同じであったことから，蚕影神社への信仰と筑波山信仰とは密接な関係にあったことを指摘している[33]。このルートは実際に機能していたと考えられ，山口及び平沢に隣接した北条には筑波山への登拝道（つくば道）の起点であるこ

第11図　金色姫伝説に関する奉額
（筆者撮影）

とを示す道標が立っている。この道標には蚕影神社を示す地名は記されていない。このつくば道を北に進み，普門寺から約300m 北の交差点に蚕影神社と記された道標（第12図）が存在する。この道標には「東　蚕影山道約二丁行右へ筑波町約十二丁」とあり，蚕影神社の参道及び筑波町への距離が記されている。また，西へ向かうと漆所を経由して大宝，下妻へ行けることも記されている。この道標は「昭和三年　御大礼記念　神郡青年会」と彫られている点から，1928（昭和３）年に昭和天皇の即位記念として建てられたものと考えられる。同様の石碑で蚕影神社が記されたものは筆者が確認した限り，この他に２本存在する[34]。この道標に従い，三叉路を北東へ約200m 進んだ丁字路に1880（明治13）年に建てられた道標（第13図）があり，「従是蚕影神社」と記されている。この道標から東に直進すれば蚕影神社へ至り，本道標は蚕影神社の参道入口を示すものと考えられる。また，これは確認できた蚕影神社を記した道標のなかで建造年代が最も古い。この道標を東に約750m 進んだ場所にも道標が存在する。こちらの道標はほとんど文字が読めないが，「→蚕影神社」と記されており，他には神郡や筑波，小幡，御大典記念，神郡青年会，昭和五年の文字が確認でき，前述の1928年に建てられた道標と同じく昭和天皇即位を記念して建てられたものと考えられる。北条から蚕影神社までの道には以上の

第12図　神郡三叉路の道標
（筆者撮影）

第13図　蚕影神社参道入口の道標
（筆者撮影）

３つの道標が存在するが，1880年建立の道標からさらに北へ約200m 進んだ神郡の十字路にも蚕影神社が記された道標が存在する。この道標も昭和

天皇即位を記念して，神郡青年会が1928年に建てたものであるが，「蚕影山約一丁行左折北条約十五町土浦方面」と記されている。確認できる限り，参道よりも北に位置する蚕影神社を記した唯一の道標であり，他には臼井経由の筑波町，立野経由の小幡，大貫経由の下館，真壁方面が記されている。現在，確認できる道標のなかで最も年代が新しいのが昭和初期であることや，これよりも北の道標が確認できないことから，西海の指摘通り，北条から北上し，蚕影神社を参詣し，筑波山へ向かうというのが少なくとも昭和初期までは徒歩での蚕影神社への参詣ルートであったと考えられる。

b. 蚕影神社の鳥居前と境内

蚕影神社の参道は前述の通り，1880年の道標から始まると考えられるが，商店や宿屋といった鳥居前町は参道沿いに形成されていない。麓には現在，春喜屋という一軒の商店が存在しており，正月時期には蚕影羊羹や神社の御神札を販売している。蚕影羊羹は現在，筑波山麓の沼田の製菓店が製造を行い，年間150本程度が販売されているという。なお，戦前には春喜屋の他に３軒ほどの茶屋が存在しており，春喜屋も宿屋としての機能を有していた[35]。

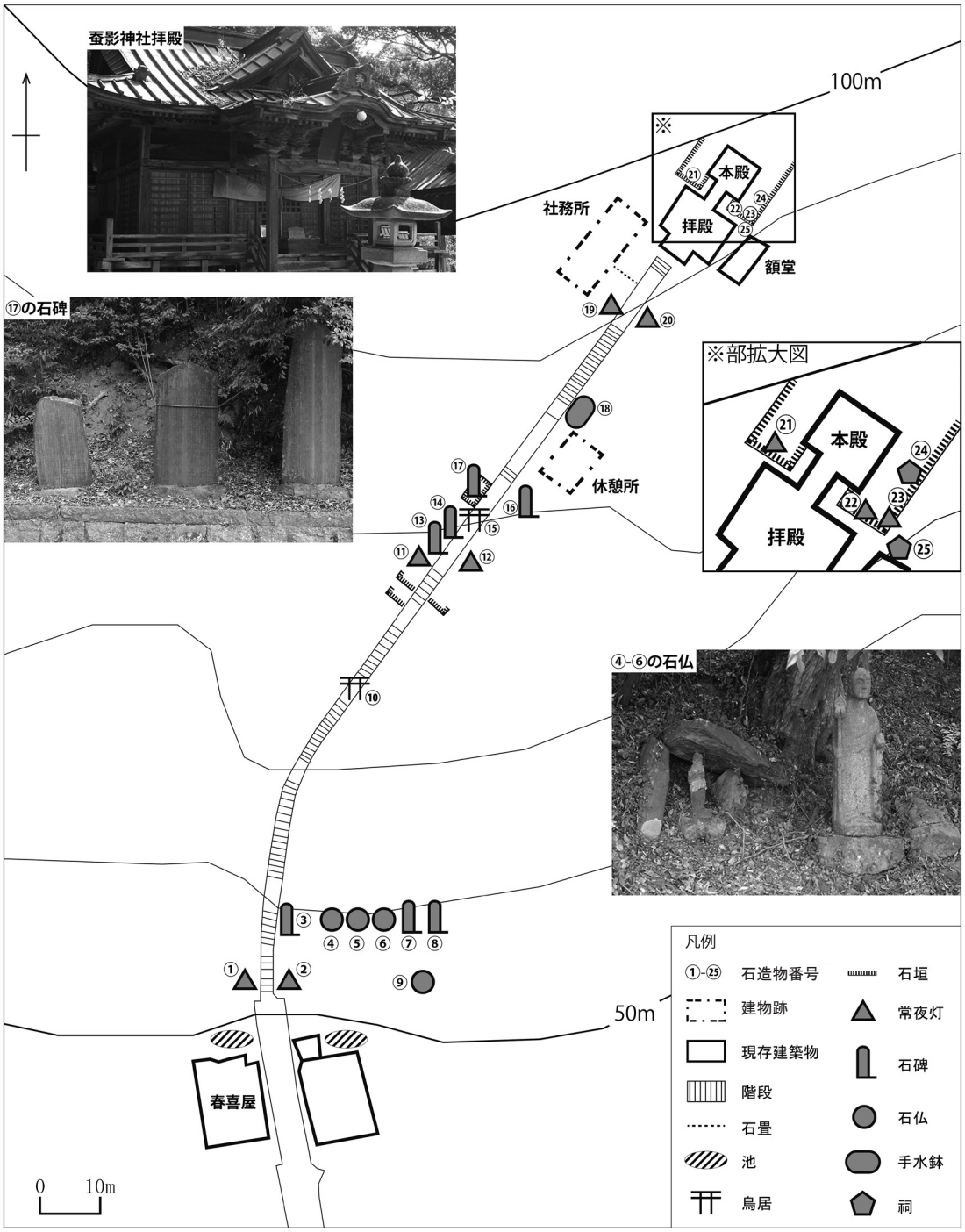
春喜屋は蚕影神社の境内入口にある商店であり，ここから蚕影神社へは石段を登ることで参拝を行う。第14図は春喜屋から蚕影神社本殿までの境内図であり，第３表は境内に存在する石造物の情報をまとめたものである。まず，本殿について，建築様式から江戸時代初期のものであると推定されている[36]。しかし，明治期に六所神社が廃社となったことに伴い，六所神社の社殿を流用したものであるという説[37]も存在する。これは，かつて拝殿にあがる階段脇に六所神社から移設された接待所があったという点[38]とも整合する。また，1881（明治14）年に蚕影神社拝殿及び本殿建設に関しての依託証[39]が存在しており，この依託証からは同年に本殿が修復されたのか新設されたのかは不明であるが，少なくとも拝殿はこの頃に建築されたものと考えられる。

拝殿には「日本一社蚕影山」と記された額が掲げられており，参道及び本殿付近には多くの常夜灯が存在する。その年代はいずれも江戸時代後期の1800年代に集中しており，寄進者は上州や遠州，武州である。そのため，関東圏以外にも静岡まで信仰圏が広がっていたことがうかがえる。また，常夜灯の寄進がなされた化政期は，関東甲信越における養蚕業の展開と同時期である。これはこの頃に蚕影山の働きかけにより養蚕業の信仰が同地域に浸透し，「常州の蚕影山」としての地位を確固たるものにしていたことの表れとも言える[40]。拝殿および本殿付近には額堂が存在しており，この額堂には前述の通り，現在はほとんど奉額は残ってないが，天狗の面が掛けられている。2012（平成24）年までは拝殿横に社務所，拝殿から階段を下りた場所に休憩所が存在したが，取り壊され現存しない。鳥居は参道に２本あり[41]，麓側に位置する鳥居は1940（昭和15）年に日支事変捷戦記念として建築されたものであり，拝殿へ至る階段の前の鳥居は1774（安永３）年のものである。1774年の鳥居の付近には手水鉢，寄進者を記した石碑等があり，麓近くには４体の石仏と庚申塔，十七夜塔，日露戦争に際しての凱旋記念碑が存在するが，庚申塔や１体の石仏は倒れたまま放置されている。

（３）蚕影神社の信仰圏

a. 額堂寄付者

蚕影神社の信仰圏は，前述の奉額や寄進された石像物から関東圏を中心に広まっていたことがうかがえる。石造物からは特に化政期を中心とした近世後期に信仰が広まっていたと推定される。一方で，蚕影神社には寄進者及び参詣者の情報が把握できる他の資料も残っている。まず，挙げられるのは境内に存在する「皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名」の石碑である。この石碑は1940年に額堂が新築されたことに伴い，寄付者を居住地別に記したものである。第15図は石碑に記された寄付の口数を茨城県外は市郡別に，茨城県



第14図　蚕影神社境内の現況

注１）図中の番号は第３表と対応。

注２）⑰の石碑は３枚で１組となっている（図中写真参照）。

注３）現在，⑩の鳥居から少し上った所には，参道を横断する形で拝殿へ上る車道があるが，図では省略した。

（地理院地図をベースに現地調査により作成）

第３表　蚕影神社境内に存在する石造物一覧

番号	種類	刻識	特記事項
①	常夜灯	（正面）享和二年常夜灯三月 （背面）上州新田郡前小屋村	竿部刻識
②	常夜灯	（正面）常夜灯 （左側面）上州桐生新宿村 （右側面）享和元酉四月吉日別当桑林寺	竿部刻識
③	石碑	（正面）凱旋記念碑 （背面）明治三十九年五月三日	両側面に従軍者の名前あり
④	石仏	刻識不明	阿弥陀如来像？
⑤	石仏	刻識不明	地蔵像
⑥	石仏	刻識不明	如意輪観音像
⑦	石碑	文化元年甲子年当初 十七夜塔 九月七日若者	
⑧	石碑	文政七歳 庚申塔 申八月卅日	
⑨	石仏	刻識不明	如意輪観音像？
⑩	鳥居	（右柱）奉　神霊奉戴 皇紀二千六百年四月二日建之 （左柱）納　天祚忠孝 日支事変戦捷記念奉納者田井村大字神郡 飯田長吉	
⑪	常夜灯	（右側面）文政八酉歳　七月廿三日 （正面）永代常夜灯 （左側面）遠州講中	
⑫	常夜灯	同上	
⑬	石碑	（正面）銀杏献木 昭和拾参戊寅年壹月吉辰 創立拾五週年記念 栃木縣河内郡姿川村北部養蚕實行組合	裏面に寄進者名あり
⑭	石碑	（正面）皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名	寄付者氏名の彫刻あり
⑮	鳥居	（右柱）安永三午年 （左柱）四月吉辰	
⑯	石碑	蚕影山碑	縁起彫刻 台部に大工の名前あり
⑰	石碑	銅板寄附連名	計３枚あり 寄付者氏名の彫刻あり
⑱	手水鉢	奉納 武州幡□郡小島村	
⑲	常夜灯	（背面）明治廿五年七月吉日	台部に奉納者名あり
⑳	常夜灯	同上	同上
㉑	常夜灯	刻識不明	
㉒	常夜灯	（背面）文政四年	
㉓	常夜灯	（背面）常陸国西茨城郡大字□□飯田□郎	
㉔	祠	刻識不明	
㉕	祠	刻識不明	

注１）番号は第14図と対応。
注２）？は推定。判読不能箇所は□と表記。
（筑波町史編纂委員会『筑波町石造物資料集　上巻』及び現地調査より作成）

内は市町村別に示したものである。

茨城県外を見ると，分布範囲は西は長野県にまで及んでおり，図には示されていないが，岩手県岩井郡からも養蚕実行組合が１件寄付を行っている。全体的に団体による寄付が多く，概ね茨城県から距離が遠くなるほど，寄付口数が少なくなり，団体（講組織や養蚕実行組合）の割合も高くなっていることがわかる。また，寄付額については，概ね団体は５円，個人は２円程度となっている。県内に関しては，県西から県南に集中しており，蚕影神社よりも東側の町村に個人寄付者が多く見られる。一方で，県央から県北及び鹿行地域からの寄付は見受けられない。これは日立市の蚕養神社と神栖市の蚕霊神社が関係していると考えられ，これらの２つの神社が所在地する地域と蚕影神社への寄付者が確認できない地域は概ね一致する。そのため，蚕影神社の信仰圏は主に県南から県西にかけて展開していたことが推測される。

b. 銅板寄付者

「銅板寄附連名」の石碑も蚕影神社への寄付者の情報がわかる石碑の一つである。合計で３枚存在し，作成年代は不明である。しかし，各人の寄付額が1940年の額堂新築の石碑とほぼ大差ないことや，東京府及び養蚕組合の文字が確認できることから，1931（昭和６）年に蚕糸業組合法により，養蚕組合が養蚕実行組合へと変化する以前のものと考えられ，時期的には1920年代後半から1930年代の間に建てられたものと考えられる。第16図は同石碑に記された寄付の口数を茨城県外は市郡別に，茨城県内は市町村別に示したものである。

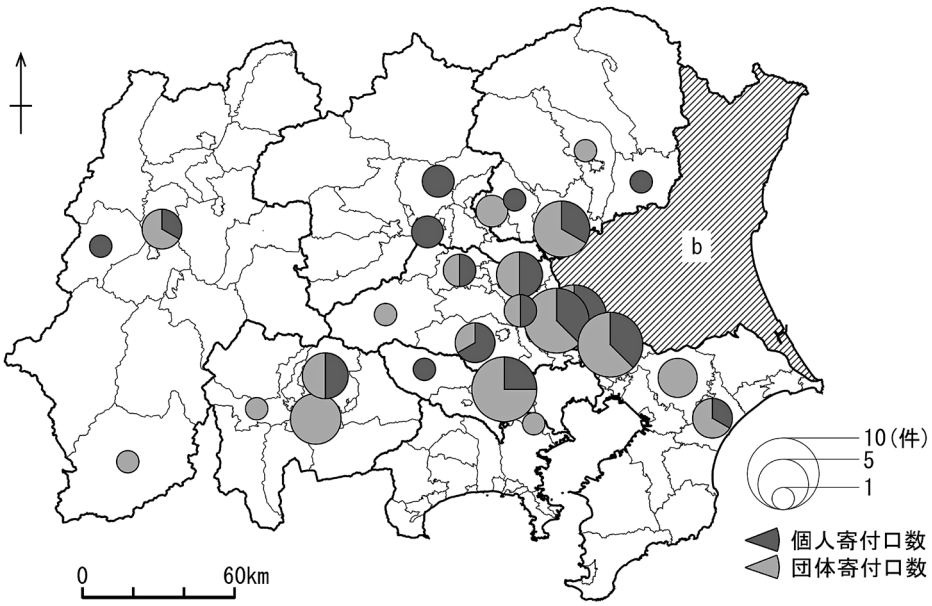
県外について見ると，分布範囲は1940年の石碑とほぼ変化はなく，図中に示した以外に愛知県碧海郡の個人からの寄付が１件存在した。寄付者が多く見られるのは栃木県の下都賀郡，千葉県の東葛飾郡，東京府の北多摩郡，山梨県の東八代郡である。また，全体的に個人による寄付が多く，団体による寄付の割合が高いのは長野県の東筑摩郡，小県郡及び埼玉県の比企郡と栃木県の河内郡，東京市の４市郡である。この石碑から読み取れる団体の特徴としては，組合が９団体寄付しているのに対して，講組織が29団体寄付しているという点である。これは1940年の石碑において養蚕実行組合が団体寄付の中心的な存在であったこととは大きく異なっている。県内も概ね1940年の石碑と同様の傾向にあると言える。一方で，行方郡や西茨城郡といった鹿行，県央地域からも僅かながらに寄付が見られ，この点は1940年の石碑とは異なっている。また，県外と同様に寄付者は個人によるものがほとんどで，稲敷郡牛久村に続いて，新治郡美並村及び七会村等からの寄付者が多い。一方で，1940年の石碑では寄付口数が多かった蚕影神社の所在地である田井村からの寄付口数は非常に少ない。

c.「蚕影山参詣者芳名簿」

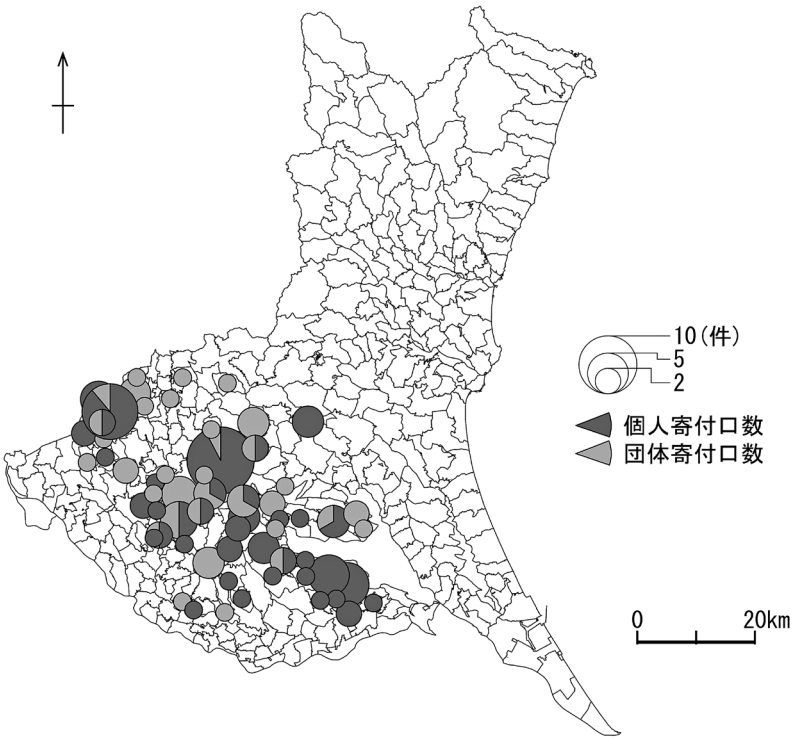
「蚕影山参詣者芳名簿」は蚕影神社門前の商店である春喜屋に残る蚕影神社の参詣者を記録したものである。冊子には「大正十四年一月」と記されているが，実際に記載が始まっているのは1922（大正11）年の４月20日であり，1927（昭和２）年４月27日までが記録されている。しかし，この資料は宿屋等で利用された宿帳とは異なり，参詣日時や参詣者の職業，年齢等の個人情報は殆ど記されていない。そのため，一部を除き，時期ごとの正確な参詣者数を分析することは難しい。そのため，ここでは記載のある1922年４月から1927年４月までの総計で検討を行う。第17図は芳名簿に記された参詣者の人数を茨城県外は郡別に，茨城県内は市町村別に示したものである。

県外の参詣者については上述の石碑と同じく，茨城県に近い埼玉県北埼玉郡や群馬県新田郡，千葉県東葛飾郡に集中しており，東京市からの参詣者も一定数見られる。また，図中には示されていないが，奈良県宇陀郡や徳島県那賀郡，静岡県榛原郡からそれぞれ１人ずつ参詣者が確認できる。榛原郡はかつての遠州に属し，近世期に遠州講中から蚕影神社に常夜灯が奉納されたこととも合わせると，参詣者は少ないながらも蚕影神社の信仰が存在していたと言える。また，我国神徳社とい

a. 関東甲信地方における寄付者の市郡別分布

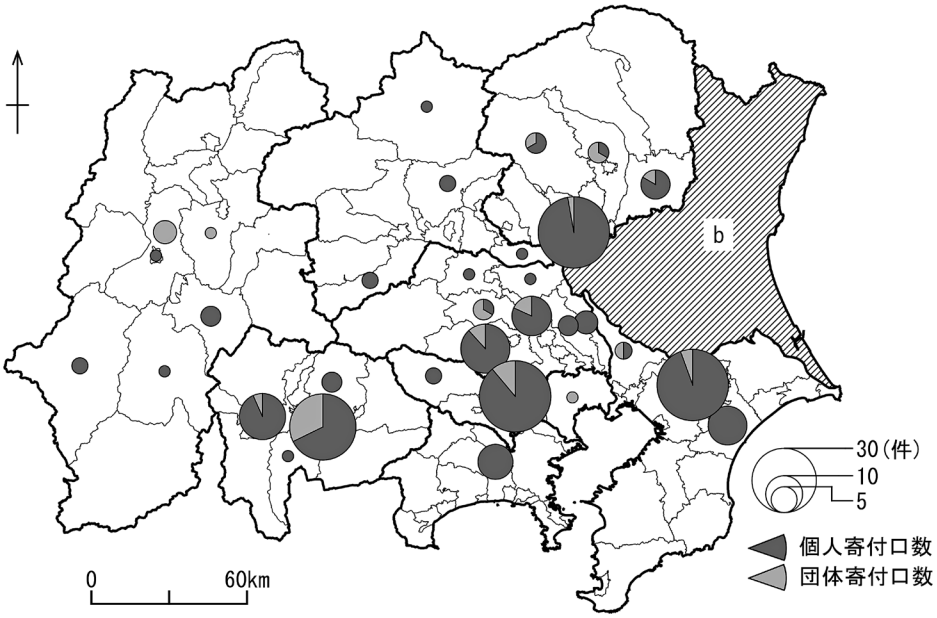


b. 茨城県における寄付者の市町村別分布

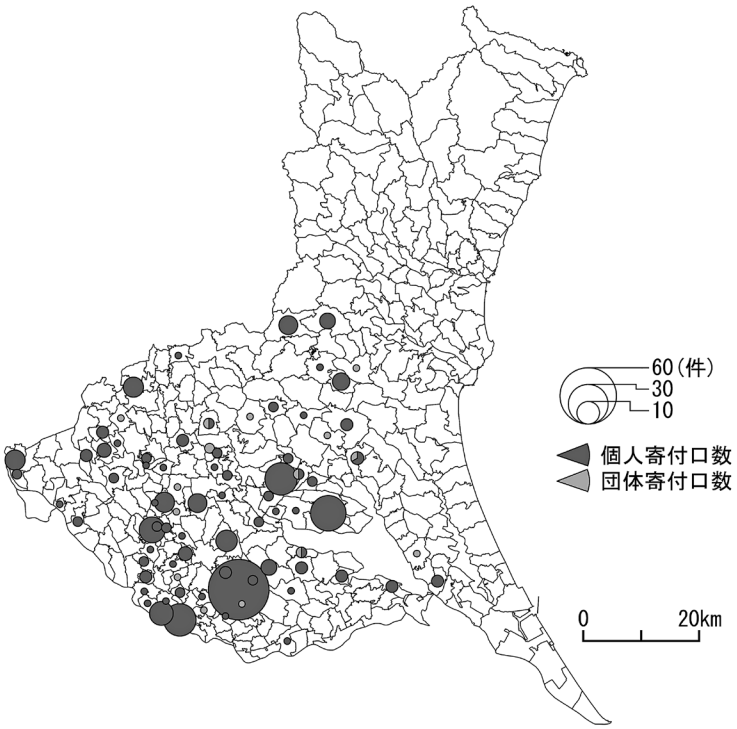


第15図　関東甲信地方及び茨城県内における額堂建築寄付者の分布
（「皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名」より作成）

a. 関東甲信地方における寄付者の市郡別分布

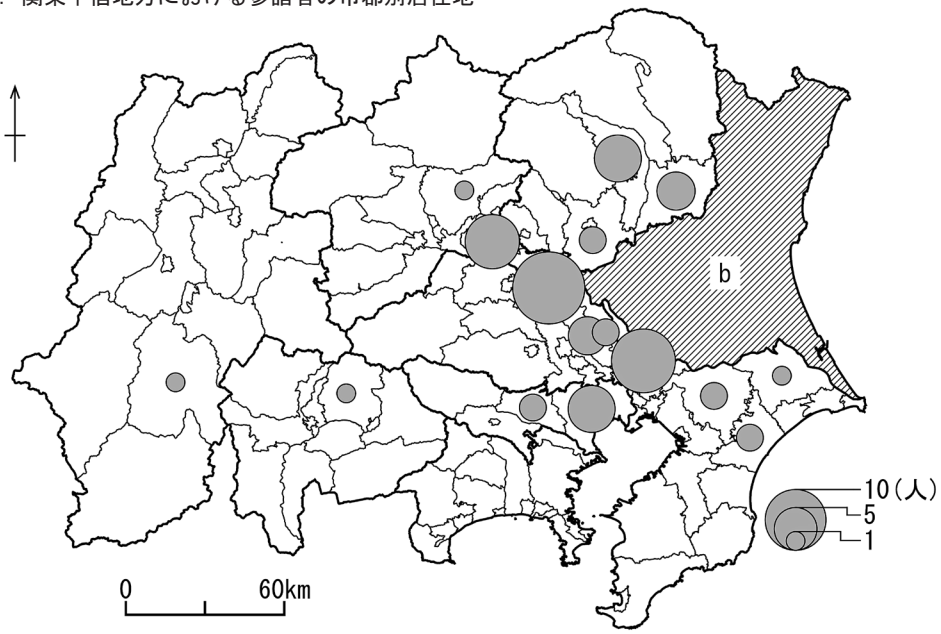


b. 茨城県における寄付者の市町村別分布

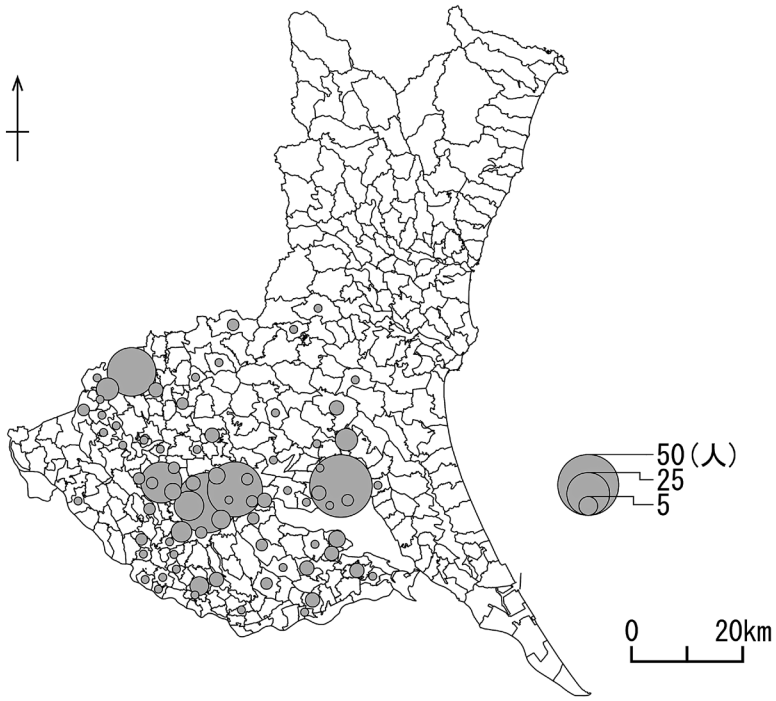


第16図　関東甲信地方及び茨城県内における銅板寄付者の分布
（「銅板寄附連名」より作成）

a. 関東甲信地方における参詣者の市郡別居住地



b. 茨城県における参詣者の市町村別居住地



第17図　関東甲信地方及び茨城県内における蚕影神社参詣者の居住地
（「蚕影山参詣者芳名簿」より作成）

う団体の東京支部から40人の参詣者もあった。この団体は笠間の吾国山を聖地としており，吾国山への集団参詣の過程で蚕影山に立ち寄ったものと考えられる[42]。県内に関しても石碑と同様の傾向が見られ，県南から県西を中心に参詣者が見られる。特に多いのは新治郡安飾村，栄村，葛城村，真壁郡伊讃村，結城郡豊田村であるが，これらは特定の１日に団体で参詣していたためである。特に豊田村については1925（大正14）年４月４日に蚕業協同組合20名で参詣しており，同様に多人数での参詣が伊讃村や栄村，葛城村でも見られる。

このように多くの団体参詣が芳名簿より確認できるが，これに関連して，春喜屋では戦前期に乗合自動車の運行を行っていた[43]。この乗合自動車は臼井―蚕影山―北条駅を結んでいたが，1934（昭和９）年の『全国乗合自動車総覧』では確認できず，代わりに同様の路線は，北条を拠点として筑波山神社への乗合自動車を運行していた植松得蔵が運行を行っていた[44]。また，戦後のことではあるが，1965（昭和40）年頃までは春と秋にバスツアーが実施されており，八郷，結城，小山，秩父など各地から参詣者が訪れていたという[45]。

芳名簿には参詣者の属性以外にも当時の人々の蚕影神社への信仰を表すような文言が記されている。一例として，「花咲く頃蚕影之山に上繭出来る様に祈願せむ」や「とにかく夏へ何奈様に蚕影山へと祈願せむ」が挙げられる。また，春喜屋について繁盛している様子を記した記載も見られた。

d. 蚕影神社の信仰圏

以上の結果をふまえて，主に大正末期から昭和初期にかけての蚕影神社の信仰圏を検討すると，概ね茨城県外は埼玉県北埼玉郡や千葉県東葛飾郡等の比較的蚕影神社に近い地域からの寄付や参詣者が多く見られたこと，範囲としては西は長野県にまで及んでおり，長野県や山梨県といった養蚕が盛んな地域からの信仰も篤かったことが指摘できる。西海は蚕影神社の分社として山梨県の５社を筆頭に，東京府，神奈川県，埼玉県，群馬県，栃木県，長野県，福島県に14社が存在することを指摘しているが[46]，この分社の範囲は福島県を除いて，蚕影神社への寄付者及び参詣者の居住地と重なる。このことから蚕影神社の信仰圏は分社の存在する範囲を中心として関東圏に広がっていたと考えるのが妥当である。一方で，極めて少数ながら関東圏や山梨県，長野県以外の地域の寄付者や参詣者が確認できることや，近世後期に遠州講中からの常夜灯の寄進があったことを考えると，必ずしもその信仰圏は関東圏や山梨県，長野県に留まるものではなかったと考えられる。

また，茨城県内では，県南から県西を中心に寄付者や参詣者が見られた。茨城県内には蚕影神社の他に日立市に蚕養神社，神栖市に蚕霊神社という養蚕に関係した神社が存在する。この三社が茨城県の養蚕信仰を分け合っている様に思われるが，三社の信仰圏は必ずしも均等に分かれているわけではない。1916（大正５）年の資料[47]によって茨城県における市町村別の収繭量を見ると（第18図），県央地域，また県南と県西地域にかけて多くなっており，これは蚕影神社への寄付者及び参詣者の居住地と概ね重なっている。一方で，県北や鹿行は特に養蚕が盛んというわけではなく，

第18図　1916年における茨城県の市町村別収繭量
（『茨城県重要副産物生産額一覧表』より作成）

水戸以北の東茨城郡の沢山村や那珂郡の大場村，多賀郡の国分村等，比較的収繭量が多い村々も見られるが，県南や県西の各町村と比較すると，特に多いとは言えない。そのため，蚕影神社の茨城県内における信仰圏は，養蚕が盛んであった県南から県西にかけての範囲と概ね一致していたと言える。

Ⅴ　おわりに

本稿では，つくば市旧筑波町の旧田井村周辺地域に関して，近世以降の土地利用と明治期以降の農業を中心とする生業の変遷，ならびに蚕影神社とそれに関わる養蚕信仰，信仰圏に着目して検討を進めてきた。

土地利用に関しては，かつて低地では掘下田や島畑がみられたことの指摘は新たな知見といえ，筑波山南麓斜面の耕地開発については事実の確認をすることができた。農業については，在来のフクレミカンに関して，その生産と消費について若干の新知見を提示でき，共有林の所有形態の変遷については従来の知見の一部を改めることができた。蚕影神社に関しては，寄付者を記した石碑を徹底的に解読することにより，その信仰圏を地図上に詳細に示すことができた。本稿では筑波山南麓地域の歴史に関して，歴史地理学の立場から一定の成果をあげることができたと考える。

本稿では生業としては農林業にのみ注目したが，地域の全体像を知るには，在来の小規模な工業にも着目する必要がある。『筑波郡案内記』によると，田井村の製粉は３万～５万円に上り，製麺産出額は１万円以上，瓦製造は２千円内外の産出額を示していた[48]。製粉業は村内に多くあった水車を用いたものであり，製麺は製粉された地元の小麦を原料とし，瓦製造は村内の粘土を利用したものであった。これらの地域の風土を生かした小規模な工業についても，地域の歴史を見直す場合には目を向ける必要がある。

（付記）

本報告は，2015年度～2018年度にかけて都合４回，旧田井村を中心とした筑波山麓地域で実施した人文学類開設科目，歴史地理学実習での調査をふまえて，著者らが新たに調査・研究を行ったものである。実習においては，筑波山麓グリーンツーリズム推進協議会の野末琢二氏には大変お世話になりました。地域の多くの住民の方々には，聞き取り調査などで大変お世話になり，元筑波町長の井坂敦實氏には所蔵資料の閲覧に便宜を図っていただきました。また春喜屋からは所蔵資料の提供をしていただきました。お世話になった皆様に厚くお礼申し上げます。

なお，本報告で引用した聞き取り調査は，注で示した他は，2013年５月に木村嘉一郎氏を話者としNPO法人自然生クラブ，筑波山麓グリーンツーリズム推進協議会が行った調査（調査記録は野末氏から提供を受けた），ならびに2015年５月に，木村氏と森田源美氏，皆川喜代氏，榎田智司氏を話者として筆者らが行った調査である。ちなみに前者の調査結果については，その概略は「筑波山麓地域情報紙 すそみろく 第28号」に収録されている。

（注）

1）平凡社編『日本歴史地名大系８　茨城県の地名』1982，559-560頁。

2）茨城県総務部地方課編『茨城県市町村合併史』茨城県地方自治研究会，1958，1119頁。

3）①筑波町史編纂委員会編『筑波町史　史料集　第９篇』1985，口絵，②『つくばの古絵図』2006，32-33頁，所収。原図に表題はないようであるが，両書ともに「筑波町沼田村と臼井村神郡村水論裁許絵図」との表題がつけられている。原図の所蔵はつくば市臼井区。

4）迅速測図原図覆刻版編集委員会編『明治前期手書彩色關東實測圖：第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖覆刻版，乾之部』日本地図センター，1991，所収の「茨城県常陸国筑波郡筑波町」による。

5）掘下田と島畑の形成要因については，竹内常行「島畑景観の分布について」地理学評論41-4，1968，219-240頁，による。

6）筑波教育会編『筑波郡案内記』1919，279頁。

7）農林水産省関東農政局 編『国営霞ヶ浦用水農業水利事業誌』関東農政局霞ヶ浦用水農業水利事務所，2009，347頁。

8）前掲３）②30-31頁，所収。原図に表題はないようであるが，図の空白部分に「天保七丙申春三月

石切ニ付地押絵図仕立也」と大きく書かれており，同書では「神郡村地押絵図」との表題が付けられている。原図は石井定爾氏所蔵。本稿では井坂敦實氏所蔵の同絵図の写真を使用した。

9）中央地学『つくば市土地宝典　筑波・北条・田井地区』1997。

10）この地域の条里遺構の発掘調査報告としては，神郡条里遺跡発掘調査会編『神郡条里遺跡』つくば市教育委員会，1988，があり，その中では「地籍集成図」を用いて，条里遺跡全体の地割と字名を復元した図が提示されている。

11）塙泉嶺編『筑波郡郷土史』賢美閣，1979，168頁（1926年刊行の復刻版）。

12）茨城県編『昭和３年　茨城県米麦産額統計』1928。

13）茨城県農会編『茨城県農業統計　第19集』1924。

14）前掲２）1119頁。なお，同書では田井村の大麦，小麦の生産量は，15,020石，8,312石となっており，通常の10倍程度の異常な数値が記されている。これは桁数を１桁間違えて記載されたと考えるのが妥当であり，第２表では１桁数字を小さくして示した。

15）1915年は茨城県筑波郡役所『茨城県筑波郡是』1918，189頁，1935年は茨城県『茨城県繭統計』1936，33頁による。

16）2015年世界農林業センサス農業集落カードDVD版で，旧田井村に含まれる農業集落の数値を合計して算出した。ただし，大貫集落に関しては農業経営体数が２戸未満のため非公表となっており，ここでの数値には含まれない。

17）①小林守・腰塚昭温「筑波山におけるみかん園の分布と小気候」筑波の環境研究７，1983，195-202頁。②青島朋子「筑波山周辺地域におけるみかん園の分布」お茶の水地理24，1983，9-17頁。③堀正岳・植田宏昭・野原大輔「筑波山西側斜面における斜面温暖帯の発生頻度と時間変化特性」地理学評論79-1，2006，26-38頁。

18）村上節太郎『柑橘栽培地域の研究』愛媛出版会，1967，158頁。

19）田中諭一郎『日本柑橘図譜　下巻』養賢堂，1948，494頁。なお，フクレに「福来」の漢字をあてるようになったのは地域の特産品としてフクレミカンを用いるようになってからである。

20）岩上長作『筑波山』交通世界社，1904，42頁。

21）茨城県立農事試験場『大正八年度　業務功程報告』，1920，84頁。

22）松川二郎『日がへりの旅　郊外探勝』東文堂，1919，262頁。

23）前掲２）1119頁。

24）謄写版で，1950年４月作成。作者は桜井吉雄。石井定輔家文書（茨城県歴史館所蔵）所収。

25）同じ内容は1950年４月に建立された入山共有林の顕彰碑にも記されている（碑文の選者は桜井吉雄）。なお，田井村の共有林については，『筑波町史』と『茨城県史』に同様の記載があるが，1900年に臼井に譲渡された共有林は86町歩，1914年に田井村の村有林に編入された部落有林は臼井の86町歩，神郡の80町歩，合計160町余と記されており，「入山共有森林沿革誌」や顕彰碑の記載とはやや異なっている。筑波町史編纂専門委員会『筑波町史　下巻』つくば市，1990，351-352頁。茨城県史編さん総合部会編『茨城県史　市町村編Ⅱ』茨城県，1975，422頁。なお，「入山共有森林沿革誌」には，臼井に譲渡された約43町歩の部落有林の動向は記されていないが，上記の『筑波町史』と『茨城県史』の記載によると，1914年に田井村の共有林に編入されたといえる。

26）「入山共有森林沿革誌」には，明治初期の山の状況やその後の植林，あるいは開墾の様子が記されている。それによると1872年から1898年の間に200万本あまりの植樹がなされ，1901年から1905年の間に松を中心に約30万本の植樹がなされている。

27）茨城県行政文書，「つくばねゴルフ場関係資料」，茨城県歴史館所蔵，による。

28）前掲６）193頁。

29）稲垣泰一編『寺社略縁起類聚』勉誠社，1998，83-89頁。

30）近江礼子「つくば市蚕影神社の養蚕信仰」常総の歴史44，崙書房，2012，39-40頁。

31）西海賢二『筑波山と山岳信仰－講集団の成立と展開－』崙書房，2012，152-153頁。

32）前掲30）41-42頁。

33）前掲31）145頁。

34）筆者は筑波山口停留所から臼井児童館，六所大仏，蚕影神社，旧田井小学校を経由し，北条のつくば道入口まで移動し，道中で確認できる道標を全て記録した。なお，臼井，神郡地区には多くの小径が存在するが，それらの小径も自転車で通行が可能な範囲で道標の確認を行った。

35）前掲30）35頁。

36）つくば市教育委員会『筑波の文化財　社寺建築篇』，1992，59頁。

37）杉田達信『条里の穂波』私家版，1967，46頁。

38）前掲31）146頁。

39）「依託証（蚕影神社拝殿及本殿建設ノ件）」1881年，石井定輔家文書（茨城県立歴史館所蔵）。

40）前掲31）147頁。

41）3本存在したという報告も存在する。江尻達也「金色姫伝説と常陸国三蚕神社」『文学部の新しい波』第2集，千葉大学文学部，2003，40頁。
42）宗教法人我國神德社HP「成り立ち」http://www.shintoku.server-shared.com/cheng-rili-ti/（最終閲覧日2020年2月13日）
43）春喜屋に残る乗合自動車の広告による。
44）鉄道省編「茨城県」『全国乗合自動車総覧』鉄道公論社出版部，1934，34頁。
45）館地区住民からの聞き取り調査（2017年6月）による。
46）前掲31）142頁。
47）茨城県農会編『茨城県郡市町村重要副産物生産額一覧表』，1916。
48）前掲6）280頁。

【資料】蚕影神社に残る寄付者名を記した二組の石碑の碑文

次頁以下は，本稿で検討した蚕影神社に現存する二組の石碑，1940（昭和15）年の「皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名」（第14図，第３表の⑭）と年代不明の「銅板寄附連名」（同⑰）について，碑文の内容を翻刻したものである。前者の石碑は１枚であるが，後者は３枚で一組となっており，後者については，石碑が変わるごとに頁の右上に（石碑〇枚目）と記した。翻刻に当って，旧字体や略字，異体字はもとより，誤字と思われる文字も原文のまま記した。

石碑には居住地，寄付金額，氏名（団体名）が記されており，昭和初期の蚕影神社の信仰圏を知る上で極めて有用な資料である。「皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名」は概ね石碑の上から下にかけて，県外から県内という順序で記載されている。３枚ある「銅版寄附連名」は寄付者の多さが窺えるが，記載順序は１枚目が主に茨城県外からの寄付者，２枚目が茨城県内から，３枚目が県外及び県外が混在したものとなっている。

皇紀二千六百年奉祝記念額殿新築寄附者連名

岩手県磐井郡大原町
一金五円　新山養蚕実行組合
東京府北多摩郡
一金十円　保谷町保谷北部〃
仝　〃　野口又左ヱ門
一金三円　〃　本橋傳藏
一金五円　小金井町中岩養蚕実行組合
仝　国分寺町共益〃
一金十円　清瀬村上清戸下宿講中
一金五円　〃　清戸下宿〃
仝　三鷹町上連雀養蚕実行組合
仝　西多摩郡福生町森田六助
長野県東筑摩郡
一金十円　本郷村大區一同
一金五円　島内村犬飼山講中
一金二円　入山辺村小出壽哉
下伊那郡
一金五円　上郷村下里講中
南安曇郡
一金二円　温村甕澄弥
群馬県勢多郡
一金二円　水瀬村荒木喜平
一金二円五十銭〃井野源太郎
一金二円　佐波郡東村小暮嘉平
神奈川県
一金十円　川崎市細山養蚕実行組合
千葉県山武郡
一金十円　公平村松之郷西部養蚕実行組合
一金五円　増穂村南當田〃
一金二円　日向村石川伴次郎
印旛郡
一金五円十銭川上村根古谷養蚕実行組合
一金五円　弥富村飯塚〃
仝　八街町第五区〃
東葛飾郡
一金五円　田中村船戸〃
一金三円　関宿村中村俊雄

山梨県東八代郡
一金十一円四十戔金生村下野原講中
一金十円　南八代村儘堀講中
一金十二円二十戔錦村井上講中
一金五円　米倉講中
仝　八代村岡養蚕実行組合
東山梨郡
一金十円　日下部町七日市場講中
一金五円　奥野田村熊野講中
一金二円　日川村窪田実
仝　〃鶴田義松
中巨摩郡
一金十一円落合村湯沢講中
栃木県下都賀郡
一金十円六十戔絹村上福良養蚕実行組合
一金五円　〃延島新田〃
一金二円　〃田島喜代作
一金十円　野木村友沼松原養蚕実行組合
一金五円　三鴨村川沼〃
足利郡
一金五円　山前村第一区〃
仝　〃　第二区〃
河内郡
一金五円　姿川村北部〃
一金二円　阿蘇郡大伏町須藤伊勢吉
埼玉県北埼玉郡
一金五円　鴻茎村芋莖講中
仝　豊野村阿佐間講中
仝　樋遣川村小林善太郎
一金三円　〃生方金兵ヱ
南埼玉郡
一金五円五十戔江面村大田袋養蚕実行組合
一金二円　〃岡野善三
一金五円　清久村小河原井養蚕実行組合
仝　〃仁丁町〃
一金十五円〃北中曽根中〃
一金二円　〃鈴木角藏
一金五円　豊春村豊北〃
仝　小林村藤浪康太郎

北葛飾郡
一金十円　静村佐間第一養蚕実行組合
一金五円　〃　〃　裏新田〃
一金二円五十戔〃奈良悦三郎
一金五円　櫻田村八甫新田前養蚕実行組合
一金二円五十戔〃渡辺貞吉
一金二円　〃遠藤佐平次
一金十円　行幸村上千塚講中
一金二円　上高野村松本梅吉
大里郡
一金五円　藤沢村樫合養蚕実行組合
一金二円　新会村松本吾作
秩父郡
一金五円　高篠村高篠中央養蚕実行組合
入間郡
一金五円　鶴島村脚折養蚕実行組合
一金三円　日東村岡田種造
一金二円小手指村北田誠作
北足立郡
一金十五円五十戔箕田村川面養蚕実行組合
一金二円　〃松村幸太郎
茨城県筑波郡田井村
一金十円氏子総代　阿久津勝二郎
仝　〃　櫻井昭一
仝　〃　飯田金次郎
仝　〃　武井助治
仝　〃　櫻井貞次郎
仝　〃　櫻井　武
仝　〃　糸賀治郎兵衛
仝　〃　杉田長右ヱ門
仝　〃　石島貞次郎
仝　〃　飯田忠助
仝　田井村神郡共栄養蚕実行組合
一金五円〃　杉木〃
一金二円〃　櫻井芳造
一金五円田水山村水守旭養蚕実行組合
仝　谷田部村上萱丸〃
一金十五円〃　福田　〃
一金五円小張村　新戸　〃

一金三円　真瀬村市石しば
一金五円　久賀村濱田養蚕実行組合
仝　吉沼村上西高野〃
仝　〃　大砂第一〃
仝　〃　戸ノ山　〃
仝　〃　大砂第二〃
仝　大穂村佐村　〃
仝　〃　玉取方穂〃
一金二円　〃　市村要一
一金五円　旭村前木養蚕実行組合
一金十五円　豊村長渡呂〃
一金五円　上郷村木俣〃
仝　〃　上北〃
一金二円　〃　萩原停四郎
仝　〃　坪井健四郎
一金五円　島名村面ノ井南部養蚕実行組合
仝　旭村中川喜太郎
一金二円　小野川村荒井映次
仝　〃　荒井本之助
仝　谷田部村飯泉力一郎
結城郡
一金五円　豊賀美村肘谷養蚕実行組合
一金五円　西豊田村仁江戸西部東部〃
一金二十円　上山川村矢畑〃
一金五円　〃　櫻井佐十郎
一金二十九円廿戔　三妻村五家講中
一金三十円　山川村山王上部養蚕実行組合
一金五円　名崎村瀬戸屋敷〃
一金十円　絹川村鹿窪　〃
一金三円　〃　長瀬新吉
仝　〃　長瀬林七
仝　〃　赤荻信一郎
仝　〃　岩田清次郎
一金二円二十戔〃藤井寅吉
一金二円　〃　宮田勘一郎
仝　〃　長田良一
仝　〃　長瀬善五郎
一金五円　玉村原新田養蚕実行組合
一金二円　大花羽村古谷東郷
一金三円　岡田村幹部新市

一金二円　岡田村　軽部春三
仝　結城町大沢和吉
仝　〃　山崎秋藏
仝　〃　山下貞一郎
仝　〃　諸　清次郎
仝　三妻村小久保良太郎
仝　中結城村高田八造
仝　石下町平間郷一郎
仝　江川村石崎惣次郎
仝　〃　岡田俊夫

新治郡

一金五円　土浦市西根養蚕実行組合
一金十円　斗利出村田宮〃
一金五円　〃　田宮中央〃
仝　小幡村富国〃
一金十五円五十三戔安飾村安食西部〃
一金十円　都和村並木〃
一金五円　〃　今泉本田〃
一金二十円　芦穂村小屋大同〃
一金七円　〃　上曽片倉組〃
一金十円　〃　上山〃
仝　安飾村安食太子〃
一金五円　七會村角耒〃
仝　佐賀村田伏山田〃
仝　美並村深谷東部〃
仝　園部村飯村六三郎
仝　〃　飯田甚平
一金二円　〃　飯塚鉄之助
仝　真鍋町畫田清太郎
仝　九重村倉田定一郎
仝　斗利出村宮本藏三郎
仝　上大津村塚田辰一郎
一金二円　栄村豊島藤次郎
仝　〃　豊島　實
仝　大岩田町塚本幸次郎
仝　〃　久保田音次郎
仝　〃　瀬尾亀之助
仝　美並村　羽成二郎
仝　〃　行方長壽

一金二円　栄村　酒井源藏
仝　小幡村　廣瀬伊左ヱ門
仝　九重村　宮本幸次郎

稲敷郡

一金十円　阿見村　阿見第三養蚕実行組合
一金五円　〃　飯島要五郎
仝　莖崎村　石塚利吉
仝　木原村　栗山正之
仝　〃　青野　茂
一金十円　〃　齊藤治雄
一金二円　君原村　渡辺　昇
仝　木原村　坂本　幸一
仝　鳩崎村　高山　巍
仝　〃　平田　豊次
仝　〃　岡野　豊吉
仝　〃　平田四郎平吉
仝　〃　坂本秀之助
仝　高田村　金子　嘉吉
仝　〃　中沢　勝次
仝　江戸崎町青木仙松
仝　朝日村　福沢かなめ
仝　沼里村　栗山　包吉
仝　舟島村　宮本要之助
仝　鳩崎村　坂本亀之助
一金三円　牛久村　加藤德太郎
一金五円　阿波村　根本芳藏

真壁郡

一金五円　伊讃村　笹塚養蚕実行組合
仝　〃　神分〃
仝　〃　飯島〃
仝　五所村　下江連〃
仝　雨引村　東飯田〃
仝　養蚕村　深見〃
一金五円二十戔柴尾村中村〃
一金七円　新治村　門井〃
仝　太田村養蚕実行組合联合会
一金二円　大村　富田茂一郎

猿島郡

一金五円　逆井山村逆井山養蚕実行組合

一金五円　七重村　半谷〃
仝　森戸村　若林新田〃
仝　古河町　下山講中
仝　生子菅村平野多助
一金二円　沓掛村　木村四平
仝　逆井山村中山貞藏
仝　森戸村　倉持周治
仝　〃　中山清一郎
仝　〃　長野一平
仝　境町　成島春吉

北相馬郡

一金五円　小絹村　上筒戸養蚕実行組合
仝　〃　下筒戸〃
仝　山王村　配松〃
仝　守谷町　坂町〃

行方郡

一金二円　武田村　飯田六郎右ヱ門
仝　〃　本沢仁左ヱ門

西茨城郡

一金十円　北那珂村片倉富谷養蚕実行組合
一金六円　岩瀬町　北部養蚕〃
一金五円　岩間町　大久保片倉組〃
一金二円　東那珂村　宮永權次郎
仝　〃　宮永清次郎
仝　〃　谷口德太郎

東茨城郡

一金六円五十戔水戸市根本町常磐養蚕実行組合
一金二円　川根村　奥谷　茂
一金十円　栃木県絹村　藤沼丈夫
一金二円　同　県長沼村石崎傳一郎
一金吾円　長野県西筑摩郡養蚕業組合
仝　稲敷郡　木原村　宮本利治
仝　結城郡宗道村　落合達一
一金二円　群馬県上陽村　新井宮一郎
仝　北相馬郡　小絹村　山口春治
一金六円　猿島郡　八俣村　高崎工四郎

松鶴年鑑

名連附寄板銅

石碑１枚目

山梨縣東八代郡之部
一金二十三円　錦村二之宮講中
一金十一円五十戔錦村井上講社一同
一金十一円八十戔　竹野原村南之川講中
一金十円　相與村講社一同
一金十円　八代村蚕影講
一金五円　一宮村竹原田講社一同
一金五円　奈良原区講社一同
一金五円　竹野原村門林講社一同
一金三円　境川村小坂講中
一金三円　米倉村武倉千之甫
一金二円　橘田雅雄
仝　根津常吉　仝　水野祐作
仝　橘田文利　仝　樋口谷五郎
仝　鈴木米吉　仝　大久保國松
仝　落合玉平　仝　早川崖三郎
仝　神田萬藏　仝　雨宮権三郎
仝　須田米吉　仝　水野登米吉
金生村下野原
一金二円　小林彦吉
仝　古澤嘉吉　仝　窪田萬吉
仝　鈴木勢治郎　仝　鈴木常太郎
一金二円　冨士見村　河内四郎
東山梨郡之部
一金十円　日川村中村講社一同
一金十円　大藤村土塚組講中
一金十円　松里村講社一同
一金四円　奥野田村牛奥区講社一同
一金五円　奥野田村　桐原利八
一金二円　小野定五郎

一金二円　西山梨郡甲運村神谷近太郎
埼玉縣比企郡之部
一金二十円　七郷村越畑講中
一金十円　唐子村神戸講社一同
一金五円　小川町松若町山下伊勢造
北足立郡之部
一金十一円　大久保村蚕業有志者
一金二円　土橋嘉一
仝　鯉沼金造　仝　友光弥三郎
仝　増岡九吉　仝　木内喜代次郎
仝　石井文次
一金十円　鴻巣町伊藤博
一金三円　石井村藤浪講社一同
一金三円　馬宮村平野鍋藏
一金二円　不動岡村矢島源次郎
入間郡之部
一金十円　加持村天下風講社一同
一金五円　髙麗村栗坪講社一同
一金五円　三芳村桑原百蔵
一金二円五十戔　山田平藏
一金二円　浅沼半藏
仝　野本四郎次
一金二円　霞ヶ関村小島吉造
仝　發知良太郎　仝大室五郎平
仝　發知周造　仝大竹安右エ門
仝　水村弥重
仝　松井村山下栄助
仝　大井村神木和四郎
仝　斉藤仙吉仝神木桑次
仝　中野勘七　仝梶定神

一金二円　山根村　大谷木須造
南埼玉郡江面村
一金二円三十戔　岡田傳左エ門
仝　鈴木武重
北葛飾郡吉川町
一金二円　加崎甾次郎　仝宮田仙吉
髙野村
仝　遠藤團三郎　仝遠藤忠左エ門
大里郡八基村
仝　松村太吉
長野縣之部
東筑摩郡
一金五円　波田村講社一同
仝　島内村犬飼山講社一同
一金三円　島内村町区分社講中
仝　本郷村　三才山日向講中一同
一金十円　小縣郡丸子町講一同
一金四円　松本市白枝黒田奥太郎
一金二円　上伊那郡小野村遠藤民次郎
一金三円　信州木曽古谷兼松
仝　神田傳十
諏訪郡米澤村
一金二円　吉田由登仝帯川茂五郎
栃木縣之部
芳賀郡中村
一金十円五十戔柳林養蚕組合一同
一金二円　阿久津五助仝上野万次郎
仝　野寺文平
仝　長沼村仝直井八次郎
下都賀郡生井村
一金五円　瀬戸竹次郎

一金三円　金澤久四郎
一金二円五十戔　金澤浅之進
一金二円　川俣信吉
仝　金澤直藏　仝　落合橘太郎
渡邊良助　仝　荒籾角太郎
仝　野木村　仝　三塙藤之助
仝　柿沼未松
仝　赤麻村　青木定藏
仝　町田藤一郎仝　蓮見多三郎
仝　間々田村栗宮養蚕組合
上都賀郡
一金五円　永野村藏本養蚕組合
一金二円柏尾村　斉藤四郎次
仝　眞名子村仝櫻井太作
河内郡瑞穂野村
一金五円　上桑島岡之内養蚕組合
仝　西刑部上組蚕業組合
東京府下之部
北多摩郡保谷村
一金五円　野口又左衛門
一金十円　砂川村第一養蚕組合
一金二円　豊泉武之助
一金五円　清瀬村上清戸講社一同
一金三円　村山崖信岸講社一同
一金五円久留米村　澤西源藏
仝　野崎定吉
一金三円　榎木萬藏
仝　野崎鎌吉
仝　中島市郎
仝　髙野信太郎
仝　清水金太郎
仝　宮崎弥之助

一金二円　久留米村　高橋亀太郎
仝　小寺哲主　仝　高橋庄次郎
仝　小寺茂七　仝　斉藤利兵衛
仝　山下茂作　仝　野崎常五郎
仝　野村弥藏　仝　三澤梅五郎
仝　小寺留藏　仝　山下喜平次
仝　粕谷寅吉　仝　榎本德太郎
仝　大島倉吉　仝　宮崎勘次郎
仝　山口幸治　仝　吉田欽五郎
仝　大島六藏　仝　島崎巳五郎
仝　髙野慶治　仝　三澤留五郎

西多摩郡髙戸井村

一金四円　宇田川ふく
一金五円　西秋留村旧渕上講社一同
一金二円　成木村　熊田良助

愛知縣碧海郡苅谷村

一金三円　犬塚傳三郎

千葉縣印旛郡之部

一金五円　布鎌村布太講社一同
一金二円　布鎌村南　山田市平
仝　川上政吉　仝　石井恒吉
仝　石井伊助　仝　鈴木政房
仝　鳩谷勇次郎

六合村　岩井芳松

仝　大森與仝根本廣治
仝　根本金治　仝　寺本清
仝　岡田仙助　仝　山崎善太郎
仝　松田松藏
一金二円二十戔安食町湯浅久造
仝　宮本安次
金二円　伊藤良太郎
仝　後藤髙之助
一金二円　八生村　佐瀬禎三郎
仝　大島儀助

八街町　小澤藤右エ門

仝　小川俊藏
仝　村松芳寧
一金五円　木下町　奥野定吉
一金三円　大野勝治
一金二円　半田源藏
仝　小御門村冨澤安太郎
一金三円　和田村直弥区講社一同

山武郡睦岡村

一金三円　石橋政吉
仝　深澤重次郎
一金二円　冨谷巳光
仝　野村七藏仝　早川安之助
仝　川島勘司仝　塩島髙次郎
仝　加藤丑松仝　槍廣治

群馬縣之部

勢多郡芳賀村神明

一金三円　角田嘉平
一金二円　北橘村眞壁藤木與平

利根郡桃野村小川

仝　吉川平司

多野郡藤岡町

仝　鈴木喜作仝　笹野源次郎

神奈川縣髙室郡大澤村

一金十円　作之口講社一同
一金三円　山口忠兵衛　外七名

茨城縣之部

東茨城郡

一金十四円竹原村竹蚕業連中
一金十円　鯉渕村萬造寺蚕業組合
一金三円　行方郡小髙村橋門講社一同

新治郡之部

一金二十円　新治村上土田講社一同
一金二円　園部山嵜駒田亀太郎

上大津村手野石田

仝　小川俊藏
一金二円五十銭　羽成又兵衛

筑波郡之部

一金二十円　上郷村手子主蚕業組合

鹿島村西檜戸講社一同

一金二円　旭村　室岡憲
仝　大山好十郎
仝　岡野孫六

稲敷郡之部

一金二十円　馴柴村馴馬講社一同
一金五円　舩島村竹米蚕業組合
一金三円　浮島村　山田福松
一金二円　生板村　荒井瀧三

北相馬郡之部

一金五円　山王村神住講社一同

内守谷町

一金三円　蚕種製造小島巳治
一金二円　鈴木要
仝　新井芳之助

大井澤村

仝　塚田冨次

髙野村金仲坪

一金二円　長野儀藏
仝　寺田由之助
仝　野口愛輔
仝　大木浦吉

真壁郡之部

一金二十五円紫尾村酒寄蚕業協同組合
一金五円　関本町蚕業組合一同
一金二円　伊讃村川島宮川六郎治

上野村向上野

一金五円　蚕種製造稲葉文武左右
一金二円　稲葉三男之助
仝　飯村源次郎

結城郡三妻村

金四円　松崎傳平

山梨縣東八代郡

一金十円　北八代村講社一同

千葉縣東葛飾郡千代田村

一金二円　根本吉兵衛

北相馬郡大野村野木崎

一金四円　貝塚朝右エ門

猿島郡新郷村中田新田

一金二円　内田喜七
仝　野口文藏

筑波郡福岡村仁左エ門新田

仝　竹澤豊次
仝　結城伊平
仝　用田膳次
仝　関弥六

新治郡七會村下稲吉

一金二円　仲戸清
仝　矢口巳之助　仝　坪井清吉
仝　斉藤左エ門　仝　矢口峯松
仝　松井清五郎　仝　仲戸茂
仝　中田惣太郎　仝　浅倉善助

新治郡中家村小松

仝　羽鳥為一郎　仝　廣瀬源左エ門
仝　筑波郡旭村要　小林德太郎

東茨城郡小川町野田

一金二円五十戔　長谷川貞之助

稲敷郡舟島村島津

一金二円五十戔　湯原吉左エ門

石碑２枚目

茨城縣筑波郡之部

筑波町

一金五円　青木館
仝二円　塚田旅館

北條町

一金五円　石田照吉

田井村

一金三円　稲葉春吉
仝二円　櫻井久太

小野川村

一金三円　宮本小一郎
仝三円　荒井映次
仝二円五十戔　荒井定吉
仝二円　荒井直次
仝　荒井精次郎
仝　中山鶴松
仝　大山定吉
仝　荒井直榮
仝　荒井慶藏

小田村

一金二円　谷貝恒一郎
仝　大島亀太郎

旭村

一金二円　小林宇之助
仝　直江金吉
仝　廣瀬喜平

豊村

一金二円　榎田佐一
仝　飯泉松次郎

十和村

一金二円　中島仙次郎

真瀬村

一金二円　飯泉半之助

稲敷郡之部

朝日村

一金五円　横瀬角之助
仝五円　飯野嘉一郎
仝三円　飯野喜平
仝二円　木村徳太郎
仝　川上健次郎

君原村

一金五円　石引藤次郎

岡田村

仝　小澤久四郎
仝　片岡才太郎
仝　藤田平助

鳩崎村

一金二円　貝塚丑之助
仝　大和徹之助
仝　糸賀稔吉

莖崎村

一金二円　石山茂市

牛久村

一金二円五十戔　宮崎弥平
仝　昼田國之助
仝　中島伊之助
仝　宮崎慶藏
仝　入江榮藏
仝　塚本榮次郎
仝　吉田帛次郎

仝　飯島宗吉
仝　本多信之助
仝　飯島常太郎
仝　宮本竹次郎
仝　橋場徳太郎
仝　橋場慎一
仝　塚崎初太郎
仝　久保田清助
仝　宍塚常吉
仝　宍塚善藏
仝　入江貞次郎
仝　成瀬徳太郎
仝　橋場喜太郎
仝　加藤徳太郎
仝　大越豊治
仝　石田恒作
仝　野島豊之助
仝　石田芳松
仝　黒須平助
仝　橋場三五郎
仝　根本宮四郎
仝　入江寅吉
仝　吉田晋吉
仝　黒須恒作
仝　中島徳次
仝　羽田勘之助
仝　豊島市太郎
仝　畫田廣吉
仝　畫田吉廣
仝　橋本繁治
仝　高野長太郎

仝　犬田與作
仝　野口長之助
仝　野口重珪
仝　野口豊之助
仝　藤田要之助
仝　春日恒作
仝　石渡樂
仝　小川てふ
仝　飯田市郎
仝　畫田房吉
仝　中島元三郎
仝　山田茂吉
仝　枕浦喜義
仝　関口露
仝　池田梅
仝　中島留之助
仝　中島慎太郎
仝　中島浩一
仝　塚崎金吉
仝　野島熊吉
仝　飯島徳次郎
仝　松本重之
仝　椿政吉
仝　飯島林藏
仝　野島與七郎
仝　中島兼吉
仝　中島仙之助
仝　野島英作
仝　淀川嘉一
仝　野島藤吉
仝　染谷利三郎

奥野村

仝　野口隆壽

浮島村
一金二円　小貫由太郎
仝　小貫義三
新治郡之部
七會村
一金五円　安達忠平
一金五円　芝山寅四郎
仝三円　髙桑丑五郎
一金二円　矢口僊太郎
仝　福田長太郎
仝　小松崎徳次郎
仝　髙橋鐵之助
仝　安田康繁
仝　櫻井巳次郎
仝　福田茂雄
仝　髙桑亀作
都和村
一金五円　枝川勇吉
美並村
一金五円　車田幸之助
一金二円八十戔小野亀之助
一金二円　車田京之助
仝　車田文
仝　山本忠助
仝　宮本捨次郎
仝　山本髙一郎
仝　阿部彦兵衛
仝　山本安藏
仝　山本文之助
仝　矢口小一郎
仝　矢口万之助
仝　山本熊太郎
仝　古川藤次郎
仝　車田重兵衛
仝　山本猪之助
仝　山本信四郎
仝　車田定助
仝　車田由松
仝　沼尻幸之亟
瓦會村
一金二円　岡野森之助
仝　比企英雄
栗原村
一金二円　飯岡仙次
三村
一金二円　太田廣介
仝　福田三チ雄
北相馬郡之部
髙野村
一金二円五十戔浅野佐太郎
仝　地引森造
一金二円　浅野松五郎
仝　川上清吉
仝　篠崎市藏
仝　地引文藏
仝　又未幸吉
守谷町
一金二円　滝本亮
相馬町
一金二円　篠塚清次郎
稲戸井村
一金二円　中村鹿造
仝　根本政吉
仝　河島喜右エ門
仝　関根仁助
仝　坂本貟之助
仝　長塚仁次郎
仝　長塚弥助
仝　中村倉吉
仝　大森春吉
仝　宮崎千代吉
仝　貝塚重太郎
仝　宮崎幸次郎
仝　宮崎忠次郎
仝　貝塚精藏
仝　大森廣吉
仝　貝塚昌造
仝　貝塚新太郎
仝　宮崎源之助
仝　貝塚宗次郎
坂手村
一金二円　松崎菊松
仝　佐戸井久馬
真壁郡之部
伊讃村
一金二円　池羽長次郎
仝　瀬端秀太郎
仝　浅野久三郎
仝　柴山國吉
仝　柴山平吉
仝　平山秀吉
仝　瀬端松造
小栗村
一金二円　一本杉政次
紫尾村
一金二円　廣瀬重三郎
東茨城郡之部
堅倉村
一金二円　滑川新八
仝　井坂孫一郎
仝　井坂佐一郎
白川村
一金二円　伊藤長吉
小川町
一金二円　岩城源太郎
西茨城郡之部
北川根村
一金五円　上野稔
一金二円　鈴木捨五郎
仝　赤津浅雄
仝　赤津清五郎
仝　上野仲次郎
仝　前澤閏
大池田村
一金三円　薗部亀之助
一金二円　橋本貞之助
仝　橋本兵左衛門
仝　長谷川鐵之助
仝　関万太郎
猿島郡之部
境町
一金二円　成島春吉
古河町
一金二円　清水喜七
仝　川鍋長太郎
仝　木村巳之助
仝　印出半左衛門
仝　川島平六
仝　中野初太郎
仝　稲葉安太郎
結城郡之部
大花羽村
一金三円　石塚甚作

仝　古谷菊次
仝　石塚韋吉
仝　深澤房吉
仝　古谷定吉
仝　石塚平吉
仝　古谷甚作
仝　石塚源之丞
仝　石塚浅吉
仝　石塚力之助
仝　石塚泰造
名崎村
一金二円　山川行藏
仝　蒔田健藏
仝　海老原儀左エ門
山川村
一金二円　野寺弥五郎
仝　久保谷福松
仝　阿久井與右エ門
石下町
一金二円　稲石和平
豊田村
一金二円　荒川　傳
豊加美村
一金二円　岩田平三郎
五箇村
一金二円　吉原四郎兵衛
豊岡村
一金二円　小林長之助
三妻村
一金二円　坂野留吉
安静村
一金二円　小川吉之助

石碑３枚目

新治郡葦穂村
一金二十円小屋蚕業協同組合
仝　郡都和村
一金二円　坂井菊太郎
仝　郡美並村
一金二円　塚本一郎
仝　古川福松
結城郡五ヶ村
一金五円　深谷運平
郡豊田村
一金二円　谷田部吉太郎
仝　落合章三
仝　飯塚隆一
仝　谷田部亀三郎
仝　飯塚晶一
仝　村野貞一郎
仝　飯塚祐太郎
仝総上村山野傳助
結城郡安静村芦ヶ谷新田
一金二円　中村源二郎
長野縣諏訪郡豊平村
仝　長田五郎作

千葉縣印旛郡八街町
一金五円　芝原佐源治
一金三円　上代熊太郎
仝　柿沼耕之助
東茨城郡小川町中迩下田
一金七円　蚕業協同組合一同
山梨縣巨摩郡落合村
一金五円　湯澤蚕業組合一同
仝六円　髙石富松
仝五円　野田安太郎
仝　長澤清次郎
仝三円　塩澤萬吉
仝　今津林吉
仝二円五十戔　今津権重
仝　横澤重平
仝二円　市槁政好
仝　今津定藏
仝　髙石仲重
仝　依田傳藏
仝　依田孝太郎
仝　保坂勘之助
仝　野田安治
北相馬郡稲戸井村
仝　宮崎勇次

栃木縣下都賀郡絹村田川
一金二円　生沼太郎
仝　吉田峰太郎
茨城縣結城郡中結城
仝　小菅小左エ門
仝　初澤德治
仝　渡邉智海
仝　塙弥四郎
栃木縣芳賀郡長沼村西大島
仝　杣山濵之助
新治郡美並村大和田
仝　塚本一郎
仝郡真鍋町
仝　菊田文次郎
猿島郡古河町
仝三円　針谷源三
結城郡大花羽村
仝二円　草間幸作
仝　古谷三郎
新治郡志筑村志筑
仝　井坂松五郎
仝　長谷川廣吉
稲敷郡莖崎村下岩崎
仝　塚本定吉
仝　片野七郎

埼玉縣北埼玉郡鴻莖村
一金十円　武藤七郎次
千葉縣印旛郡大森町鹿黒
仝五円　篠田定吉
西茨城郡宍戸町南友部
仝二円　槁本善太郎
千葉縣東葛飾郡田中村
仝五円　船戸蚕業組合
長野縣上伊那郡東箕輪村
仝二円　花岡源藏
真壁郡下妻町
仝　川田初太郎
仝　市村清平
栃木縣河内郡吉田村
仝三円　横島彦平
西茨城郡北山内村箱田
仝三円　岡野千代藏
仝二円　岡野秋次郎
仝　松井信雄
仝　柳槁甚右エ門
仝　田村保吉
仝　久野百松
仝　関英之助
千葉縣山武郡増穂村富田
仝二円五十戔横左内良助
仝　今井養之助

郡馬縣邑楽郡大箇村下五箇
一金二円　茂木覺藏
行方郡香澄村牛堀
仝　髙槁真澄
仝　長島覺太郎
仝　前島舜司
山梨縣東八代郡冨士見村
一金十二円　今井講中
稲敷郡岡田村柏田
仝二円　鈴木角之助
請負人田井村
一金二百円　飯田藤吾
猪瀬藤太郎
真壁郡川西村
一金二円　関弥一郎
筑波郡三島村
仝　高橋文二
千葉縣印旛郡木下町
一金三円養蚕組合
仝止　布鎌村
一金二円　荒井源二郎
新治郡新治村
仝　石塚啓三
埼玉県南埼玉郡平野村
仝　小林登一郎

東京府下北多广郡東村山村
一金五十七円　文岱講
山梨県東山梨郡七里村
一金五円　中村季候
栃木県下都賀郡穂積村
一金二十円　青木太三
外二十名分
猿島郡衣戸村
一金二円　中山清一郎
仝　倉持間次
新治郡美並村
仝　塚本一郎
筑波郡吉沼村田倉
一金三十二円養蚕組合御中
世話人　今里常五郎
村田清次郎